

地球における労働の魔の手から逃れ、左団扇な生活を目指す話

やがみ0821

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もしくは、ありふれていない奴がありふれたことをする話。

## 目次

ありふれていない奴	1
かめはめ波が撃てるかもしれないので、頑張ってみようと決意する話	5
ありふれていないステータスの伸びに驚かれた話	12
意思表示をする話	17
落差が酷い話	27
大きな動き	34
封印されし少女に捧げるはサソリの丸焼き	44
なお、拒まれる模様	44
思想の麻薬	50
辿り着いた真実	54
ハウリア族への人道的介入	60
なお、下心がある模様	60
ミレデイ・ライセンの敗北	66

ありふれていない奴

北条律歌は前世の記憶というものを持っている。

といっても、彼女は転生者というカテゴリーに自分を加えていいかどうかはちよつと分からなかった。

転生というのは記憶だけでなく意識も連続している存在ではないか、と彼女は考えている為だ。

「記憶はあるけど、意識がそうなのかと言われると……でも大きく影響を受けているし……やっぱり分からない」

色々と調べてみたものの、宗教とか哲学とかそういう深い沼に嵌っていきそうな気がしたので、律歌は考えることをやめている。

さて、前世の記憶といっても、それは多岐に渡る。

それこそ前世の自分の好きな食べ物といった役に立たないものから、人生において役に立つようなことであつたりと様々だ。

特に役に立ったのは勉強に関する考え方だ。

勉強をするということは人生の選択肢を増やすということに繋がる――

この為、彼女は小学校在学中に受験資格が不要な土業の資格取得に動き、見事に最年少合格を果たしている。

新聞やテレビで当時は話題になったのだが、律歌からすれば自分のような状態になれば将来のことを考えて動くのは誰だつて同じだろうと思っっている。

といつても、前世の記憶によれば就職すると人間関係で理不尽なことも多い為、就職せずに油田でも掘り当てて左団扇で生活したいというのが偽らざる本音であつた。

なお前世の記憶があるということはプラスな部分だけでなく、マイナスな部分もある。

その最たるものは前世の性別が男であつた為か、それに引きずられて、恋愛及び性的な対象は女の子であること。

昨今、認知されてきたとはいえ世間的にはまだまだ同性愛に関しては色々と偏見もある。

しかし、それに関してはあんまり気にしていなかった。

なぜならば、律歌には既に同性の恋人がいるからだ。

彼女とは家が近く、昔から仲が良かった。

彼女の父親の死をきっかけにゴタゴタがあったものの、律歌が自分の両親に相談して色んなところに助けを求めたことで、無事に解決している。

その頃から、彼女——中村恵理に過剰なスキンシップをされるようになり、中学2年の時に告白された、という具合である。

そんな律歌であったが、油田を掘り当てる以外にも身体に関わる欲望というものはある。

それこそまさに全人類の夢と言っても過言ではないもので——律歌は個人的にそう思っている——両性具有になることだ。

二次元の世界ならそういうのも自由自在であるのだが、残念ながら律歌は三次元世界の住民である。

どうにかして画面の中に入ろうと前世でもやっていたようだが、それが無理であるのは今世でも変わらない。

前世の記憶を覚えている自分ならワンチャンあるのではないかと何とか妄想しながら、恋人とイチャつきつつ高校生活を送っているのが律歌だ。

そのとき、スマートフォンが鳴動する。

手にとって画面を見れば恋人からだ。

明日は月曜日ということもあって、今日はお泊りはなしである。

『寂しいよお……』

電話に出ると恵理の切ない声が聞こえてきた。

依存性な彼女であるが、律歌も負けてはいないのでちょうど良かった。

そして月曜日。

憂鬱な朝も律歌は恵理と一緒に登校することで吹き飛ばしてもらい、学校に到着しさえすれば既に8割のスケジュールが終わったようなものである。

あとの2割のうち、1割は授業を受けることで、もう1割は帰宅することである。

学校が終わった後のことを考えながら、律歌は昼休みを迎えていた。

彼女はいつも通りに恵理と一緒に教室で昼食を食べながら、雑談していた。

「やっぱり私も異世界にでも召喚されて、スゴイ魔法でドツタンバツタンやりたい」

「かつこいいいなあ……」

律歌の話は基本的に全肯定してくれる恵理である。

そして、律歌は基本的にボケまくる為、ツツコミ役が不在であるところでも果てしなく話は広がっていく。

「いつ異世界に召喚されても良いように、スマホ用ソーラーチャージャーと必要そうな情報が書かれたホームページはオフラインで閲覧できるようにダウンロード保存してあるのよ」

ドヤ顔で豊満な胸を張る律歌に恵理は目を輝かせた。

そういうところまで気を配っているなんて、さすがは律歌だ、と彼女は思ってしまうのである。

「ねえねえ、律歌はどんな魔法が使いたいの？ 空を飛ぶとか？」

「定番ね。それもそうだけど……でもやっぱり核かな。とりあえず核をぶつけとけば大抵のものには勝てるから……高高度を超音速で飛びながら核攻撃連発したい。汎用人型決戦兵器になる……い！」

予想の斜め上の答えであるが、恵理からすれば愛する人がそこまで考えているなんて、と感心してしまう。

2人の会話を何気なく聞いてしまった寝起きの南雲ハジメは心の

中でツツコミを入れる。

いやいやそれ、異世界が壊れちゃうだろ――

そんなことを思っていると、彼のところへ白崎香織がやってくるのが目に見えた。

ハジメにとってはまたクラスメイト達から面倒な視線を向けられるのかと憂鬱に思い――そのとき、床全体に幾何学模様が現れた。

彼は思わず目を見開いて、何も動けなくなってしまったが――嬉々としてガッツポーズをする女子生徒がいた。

容姿も頭も良いが、性格だけが残念というのがクラスにおける北条律歌の評価である。

性格が残念という評価はハジメからしても正しいと思う。

「召喚魔法!?! メシ食ってる場合じゃない! 異世界でドツタンバツタン大騒ぎするわよ、恵理!」

「うん! 律歌とならどこでも行くよ!」

「ポジティブ過ぎんだろお前ら!?!」

思わずツツコミを入れてしまったハジメ。

そんなこんなで、彼らは異世界へと召喚されるのだった。

かめはめ波が撃てるかもしれないので、頑張ってみよう  
と決意する話

律歌は自室で気色悪い笑みを浮かべていた。

まさか本当に異世界召喚されるとは思ってもみなかったが、予想外の幸運である。

召喚背景もありきたりな感じで、魔人族との戦争で最近、人間族が押されているので神に頼んで召喚したとかいうものだ。

だが、絶対に何か裏があると律歌は予想している。

その理由としては、神という存在は碌でもないものばかりという考えによるものだ。

エヒトとかいう神様がよっぽど良い神なら話は別だが、ギリシヤ系のノリであったならば目も当てられない。

とはいえ、何かご利益をくれるなら信仰してやってもいいくらいには律歌は思っていた。

そんなことは横において、律歌は自分のステータスプレートを見る。

胸の高鳴りを抑えきれない。

彼女の天職は魔導師である。

「これでふたなりになれる……恵理とあんなことやこんなことが出来る……！」

今日の昼間、ステータスプレートを渡され、血を垂らして出てきたこの天職とステータス。

その後に訓練と座学が開始されたが、律歌はその最中も頬の緩みを抑えることができなかった。

恵理は律歌が上機嫌であったことにつられて、彼女も上機嫌であった。

クラスメイト達は律歌と恵理が親友であると考えていたが、実際にはどういう背景でどんな関係に至っているのかは知らない。



気軽に話せるものでもない為、律歌も恵理も誰にも教えていなかった。

「何が都合が良いかって、魔法なら何でもできる。たぶん」

色々手順が必要らしいが、律歌のステータスプレートの技能欄には魔力操作とか魔力制御とかいう項目が幾つもの技能の中に紛れていたの、騎士団長のメルドにそれとなく尋ねてみたところ、彼は口外しないほうが良いと助言をしてくれた。

「どうやら、とんでもないモノを引いてしまったようだ。」

技能は先天的なもので、派生を除けば増えることはないというが、こんなにも自分の欲望を達成する為に都合が良い天職とステータスであるのはなぜか——？

そこで、律歌はやっぱり自分は転生者というカテゴリなのだと思える。

転生すると力が増すというのはありがちなパワーアップ方法で、MOとかでもよくお世話になる。

前世の意識はどうなったのか疑問だが、融合でもしたんだろうと彼女は思う。

ともあれ、現実においても転生したらパワーアップするのか甚だ疑問だが、あいにくと律歌は他の転生者を見たことも聞いたこともない。

かといって、超越的な存在に連絡が取れるというわけでもなく、律歌としては何だか知らんけど都合良くパワーアップした、ラッキーと思っただけなのである。

エヒトとやらに聞けば教えてくれるかもしれないが、あんまり気乗りしない。

悪魔なら契約だけは守るからその範囲内では信用してもいいが、神というのは根本的に信用できない、神話的に——  
そういう考えが律歌にあった為だ。

そして、魔力というのは何なんだろう、と律歌は己に問いかける。

「体内の魔力を使うとのことだけど……それはどの時点からあったのか？」

地球の頃からあったのなら、地球における健康診断で何かしらの異常が見つかったても良い筈だ。

あるいは地球における科学的な検査では発見できない、未知のエネルギーかもしれない。

もしくは地球人類にも既に存在しているが、未だそれを発見できる技術レベルに達していないという場合も考えられる。

トータスではエヒトなる神によって、魔力が日常的なものになっているのかもしれない。

魔力が無い亜人は神に見放された存在として迫害されていることから、神が何かやっているんじゃないかと律歌は思うが、所詮は彼女の脳内妄想に過ぎない。

「まあ、そんなことはどうでもいいんだけど、魔力が何かについているのが問題なのよね」

体内の魔力を詠唱により魔法陣に注ぎ込み、陣に組み込まれた式によって魔法が発動するというプロセスがこの世界の魔法には必要だ。

この式も基本的なものに加えて、発展的なものを付け加えていくと陣もその分、大きくなる。

「魔力とは様々な物質に作用することができる粒子と仮定しておくのが、妥当なところかしら……」

物理法則がどうなっているかは分からないが、少なくともこの世界——トータスでも重力は存在する。

それもおそらく地球と同じ程度で、また大気組成に関してもそうだろう。

たとえば、もしも大気組成に差異があるのなら、技能の中に言語理解だけでなく毒無効化とかそういうものまで出てくるのではないかと律歌は考える。

あるいは転移の際に、体ごとトータスに適應できるように作り変えられたという可能性は無きにしもあらずだが、それならば言語理解という技能が出てくるのもおかしい話だ。

エヒトとやらがどこまでできる神かは分からないが、実際には体を作り変えているが、あえて転移しただけと思わせる為に言語面に関しては弄らなかつたのかもしれない。

そんなことをする理由は皆目検討つかないが、超常存在の精神や思考は人類と異なるだろうからして、深い理由があるのかもしれない。「思わず陰謀論に思考がいつてしまうけど、楽しいから仕方ないわね……それよりも、魔力は使える。便利だわ」

エネルギー保存の法則がこの世界でも適用されるか分からないが、十分に使いこなす為には勉強と鍛錬を頑張るしかない。

「しかし、あれね。帰りたいとか言っている人もいたけど……そんなに帰りたいたい？」

確かに地球では色々と見て回っていないところが多い。

恵理と一緒に海外旅行とか行きたいが、しかし待ち受けているのは就職である。

働きたくないでござる——

この魔導師の力を使ってトータスで一攫千金、金持ちになってウハウハしたいでござる——

それが律歌の本音である。

心残りは両親のことくらいだが、もしも帰還できるとなったならば、そのときに手紙でも持っていつてもらえばいいだろう。

だが、現状では帰還手段が無い上、教会の言っていることが本当ならば神頼みが唯一の手段だという。

そんな不確実なものをアテにするならば、帰れないという前提で行動した方が良くと彼女は思う。

というか、そもそも魔法を極めれば世界間の移動ができるようになるかもしれない。

「ふたなりになって、色んな魔法を扱えるようになる……！ 目的は決まった。あとは行動するだけだ」

そのとき、律歌は自分の部屋に近づいてくる気配を感知する。誰だかすぐに分かった。

程なく扉が叩かれる。

「恵理、いるよ。来て」

そう律歌が呼びかけると、扉が開く。

そこにいたのは彼女が言い当てた通りに恵理が立っていた。

彼女はすぐに扉を閉めて、鍵を掛ける。

そして、恵理は椅子に座っていた律歌へ抱きついた。

「ねえ、律歌……僕の天職、降霊術師って昼間に言ったよね？ どう思った？」

「便利そうって思った。死体をたくさん……100万とかそこの数を操れば大抵のやつには勝てると思う」

「さすがは律歌だね。ねえ、律歌。人を殺すかもしれないけど、みんな分かっているのかな？ 何かノリが軽いんだけど」

「いいんじゃないの？ 殺す覚悟云々ってよく漫画とかだと出てくるけど、殺すのにいちいち覚悟が必要だったら、世の中の殺人事件はもうちよつと減っていると思う」

「だよね。僕としては律歌以外はどうでもいいから。死のうが生きようが、ね……」

うんうんと頷きながら、律歌は問いかける。

「ところで恵理は私が人を殺したらイヤかしら？」

問いに恵理は笑みを浮かべて、首を左右に振る。

「ううん。だって、律歌だもん」

恵理の言葉に律歌は満面の笑みを浮かべて、小柄な彼女の背中へ両手を回す。

そして、彼女の耳元で律歌は囁く。

「私、恵理のそういうところ大好き。あなたは私にとって特別よ。だから、私はあなたには全部伝えてあるのよ」

律歌の言葉に恵理は微笑み、答える。

「転生って本当にあるんだね……」

「天文学的な確率の宝くじに当たったようなものだと思う……前世の記憶にある限りでは、マトモな性格をしていたんだけど、何だか気づいたら……こんな性格になっていたのよ」

「それは簡単だよお。律歌の話だと幼稚園のときに、前世の記憶が頭に出てきたんだよね？」

「うん」

律歌が頷くと恵理はにっこりと微笑む。

「そんな子供のときに、大人だった前世の律歌の記憶が一気に流れ込んだなら、性格が変わらないほうがおかしいんじゃない？」

「それもそうね……」

なるほど、と律歌は頷いてみせつつ、自分の性格について思いを馳せる。

そして、ポツリと呟く。

「私の性格って何だろう……」

「良く言えば破天荒、悪く言えば非常識かなあ……普通ならやらないことをやっちゃいそう」

「まだ何にもやってないわよ……」

ジト目の律歌に恵理はくすくすと笑う。

「まだってことは何かやる予定があるんでしょ？」

「まあね。ぶっちゃけさ、地球で就職して会社勤めするよりも、こっちにいる方が気楽で良さそうだわ。それに能力を鍛えれば色々とできそうだし……帰る必要なくない？」

「うん、僕もそう思う。律歌が帰らないなら僕も帰らないよ」

「恵理ならそう言ってくれてくれるって思った。で、私はふたなりになって、魔法を極めようと思っているんだけど……」

律歌の言葉に恵理は怪しげな笑みを浮かべる。

彼女にとって大事なのは最初の単語である。

「律歌のえっち」

「嫌かしら？」

「ううん。でも、子供ができるようになったとしても、子供はいらない。あの女も僕のことはいらなかったみたいだし……」

あの女と言われて律歌がピンとくるのは恵理の母親である。

母親にとって、夫と娘を天秤に乗せたところで、それは常に夫の側に傾くものでしかなかったようだ。

慰めの言葉とかそういうものを律歌は掛けたりしない。

「私も子供はいいかな。恵理を独占したいから」

その言葉に恵理は満面の笑みを浮かべて、律歌を強く抱きしめる。

「僕も律歌の為に強くなるよ」

「じゃあ1000万ね。そんなくらい操って」

「……が、頑張るよ……」

「声が震えているけど、大丈夫?」

「だ、大丈夫……」

小動物みたいでかわいい、と律歌は恵理の頭を撫でつつ思う。

やはり、漫画とかアニメとかの魔法や技の再現を試みるべきね――

ありふれていないステータスの伸びに驚かれた話

翌日、律歌は夜が明けきらぬうちに起き出した。

彼女は隣で寝ている恵理を起こさないように——などと優しくするつもりはない。

「恵理ー！ 起きてー！ カンカンカンカン！ 起きてー！ すつごく朝！ もう日が上っているよー！」

「起きてるよー？」

「……私ってホントバカ……」

むくりと上半身を起こして小首を傾げる恵理に律歌は自己嫌悪に陥ったものの、30秒くらいで立ち直る。

互いに全裸であるが、今更見られて恥ずかしがるような間柄でもない。

「律歌が起きる気配を感じて、僕が起きないわけがないよ」

「だよね……ともあれ、修行よ。まずは魔力を増やさないと駄目だと思う。莫大な魔力があれば、大抵のことは何とかできる」

「うん、いいよ。瞑想すると良いんだっけ？」

「うん。だけど、ここで私が漫画で見た集中力がアップするスゴイ修行法がある……」

「僕も見たいことある？」

「たぶん……1本の指の先端に魔力を集めて、尖ったものの上で逆立ちするって感じにやるといいんじゃない？」

「元ネタは霊力の修行だよね、それ」

「似たようなものだから、平気平気……知らないけど」

「……ねえ、律歌。それって失敗すると大変なことになるんじゃない？」

言うまでもなく串刺しだ。

さすがに恵理も止めざるを得ない。

「じゃあ、1本の指の先端に魔力を集めて、それだけで逆立ちするって

いうのにする。尖ったものじゃなくて、普通の床とかベッドで「できるの？」

「やってみなくちゃ分からないわ」

というわけで早速実践の前に——しかし、全裸のままでは問題があるので服を着た。

そこで律歌は幾分冷静さを取り戻して、恵理に問いかける。

「……そういえばあれよね、魔力の直接操作って普通はできないんだっけ？」

「うん」

「じゃあ恵理は瞑想して。悟りを開けるくらいに」

「頑張るよ。でも律歌のことで頭がいっぱいだから難しいかも」

「そういうところが好き……って、それよりもともかくやるわよ」

「うん、頑張って」

にこにこ笑顔の恵理を見ながら、律歌はいよいよ逆立ちを敢行する。

いきなり指一本で逆立ちというのはハードルが高いので、まずは普通に逆立ちを行ってみる。

しかし、5秒もしないうちに倒れてしまう。

「……根本的に体のバランスに問題があったわ。指に魔力を集めることは昨日、すぐにできたのに……」

そう言いながら、律歌は人差し指に魔力を集束してみせる。

淡く光る小さな球体が彼女の人差し指の上に来ていた。

そんな彼女に恵理は告げる。

「逆立ちなんて普段はしないから仕方ないよ。一緒に瞑想しよう？」

「……うん」

そんなわけで2人は朝食まで瞑想に耽った。

朝食後、律歌と恵理は図書館へ向かう。

知識を蓄える為だ。

まずは魔法関係に限るが、いずれは色んな分野についても学びたい



というのが律歌の希望であり、恵理もまたそれに倣った。

特定分野だけではなく様々な分野において、横断的な知識を身につけることで、発想に幅が広がる。

もつとも、律歌は基礎こそが全ての土台であり、何よりも重視すべきものだという考えがある。

故に、2人は子供用の基礎教材からまず始めた。

その理由は、専門用語を子供にも分かりやすいように、簡単な言葉に言い換えてあり、かつもつともポピュラーな魔法について学ぶことができる為だ。

そして2人は図書館で魔法に関する様々な子供用教材を読み漁り、やがて訓練施設へと向かった。

メルドは律歌と恵理のステータスプレートを見て、思わず声を出しそうになったが、何とか堪えた。

図書館で2人が熱心に勉強している、ということ部下から聞き、ステータスの伸びを一応確認しておこう、と彼が思った為だが——予想以上に伸びていた。

幸いにも他の面々からは離れている為、2人のステータスプレートをメルド以外は見ていない。

元々律歌も恵理も魔力のステータスが他のステータスよりも高かった。

総合的には天職・勇者である天乃河光輝が勝るのだが、魔力という一点に限って2人は彼よりも高い。

特に律歌の方は異常と言っても過言ではない技能がある。

魔力操作と魔力制御——魔力を直接どうこうできる存在なんぞ、メルドはモンスター以外では聞いたことがない。

さすがにこれは彼の手には余るもの、かといって誰かに相談する

わけにもいかない。

誰に相談しようが、どこからか情報が漏れて権力闘争の道具にされるのがオチである。

そのとき、律歌が悩むメルドに声をかける。

「メルドさん、立ち回りを教えて」

「あ、ああ……昨日も言ったが、技能については口外するんじゃないぞ」

「ええ、心得ているわ。とりあえず私と恵理はまず魔力を重点的に鍛えつつ、戦闘においては一撃離脱という形を取りたいのだけど……」

律歌の言葉にメルドは思考を切り替える。

「ふむ……悪くないな。遊撃としても動ける魔法使いというのは有り難い存在だ」

「立ち回りとか色々詳しく教えて欲しい。私と恵理には、そういう知識や経験がゼロなので」

「勿論だ。宮廷魔法師達では、そういうことは教えられないだろう」

荒事に対して真っ先に投入されるのが騎士団であり、宮廷魔法師とこののは最後の切り札として温存される。

故に騎士団の方が様々な状況を宮廷魔法師達よりも経験しているのだ。

「私はあなた達が血と汗で得た戦訓を学びたい」

律歌の言葉にメルドは確信する。

彼女は他の少年・少女達とは何かが決定的に違う、と。

故にメルドは提案する。

「……正直に言おう。今の訓練を続けてもステータスは伸びる。だが、君達に対しては実施していない、より過酷な訓練もある。伸び率は後者のほうが良いが……どうするか？」

メルドの問いかけに律歌は恵理の方をちらりと視線を向ける。

すると彼女は小さく頷き、それを確認した律歌はメルドへ視線を戻す。

「やってほしい。さつきも言ったように、魔力を重点的に伸ばしつつ、他のステータスも鍛えたい。知識や立ち回りとかそういうったものも

覚えたい」  
「僕もです」

律歌と恵理の言葉にメルドは力強く頷いたのだった。

## 意思表示をする話

「マジで無茶苦茶キツイけど、ステータスの伸びが異常で私は嬉しい」  
「僕もしんどいけど律歌と一緒にだから嬉しい」

2人は律歌の部屋で互いのステータスプレートを見せ合っていた。  
恵理は律歌の魔力をはじめとしたステータスの伸びに素直にスゴイと思えてしまう。

「律歌は頑張ってるから……スゴいなあ」

「恵理だって、魔力の伸びがスゴイじゃない」

2人に対する訓練は体と精神に大きな負荷を掛けるというのがコンセプトであり、とにかく理不尽だ。

クラスメイト達に知られると面倒くさそうなので、みんながいる訓練施設とは別の場所でやってもらっている。

しかも訓練は早朝から夜の帳が下りる頃まで続く。

休憩が合間にあるものの、それでもほとんど訓練漬けの日々だ。

訓練の時間も密度も他のクラスメイト達よりも長く、また濃密だ。  
「もう少ししたらオルクス大迷宮っていうところだけ……どうしようっか？」

律歌の問いかけに恵理は首を傾げる。

「2つの選択肢があると思うのよ。魔族との戦争で体よく使われる為に訓練をつけてもらっているのと、ここで頂くものを頂いて離脱するっていうパターン。どっちもメリット・デメリットがあるわ」

「律歌はどうしたいの？」

「恵理ってばすぐ私の意見に従おうとする……そういうところ、好き」  
「えへへ……だって、律歌がしたいようにしてほしいもん」

はにかんだ笑みを浮かべる恵理の頭を撫でながら、さてどうしたものかと律歌は考える。

現状維持をした場合のメリットは国が後ろ盾についており、力や知識を得るには環境も良い。

デメリットとしては国によって首輪をつけられている状態であり、あんまり自由にはできない。

もしも何かがきっかけで、自分達に対する方針が変わったら大変なことになる。

何よりも魔族との戦争に勝利したとしても、その後は飼い殺しにされるか、あるいは権力闘争の道具にされるか、もしくは邪魔になつたから始末する、という可能性もゼロではない。

また帰還手段に関しても、教会の言っていることが本当なら神頼みでしかなく、それは非常に不確実なものだ。

何よりも強大な戦力である自分達をそんな簡単に手放すだろうか、という疑問がある。

一方、ここで逃げるというメリットは国に縛られないということだ。

資金調達やら何やら全て自前でやらなければならないが、まさに自由だ。

戦争そつちのけで修行に没頭することだってできるし、亜人族や魔族と交流を深めることだってできるかもしれない。

その分、自分でやらかしたことは全部自分で後始末をせねばならない。

デメリットは危険視されて国や教会から追手が掛かるかもしれないこと。

何ならクラスメイトに始末させようとするかもしれない。  
クラスメイトには過激すぎる正義の味方が1人いる為だ。

あれこれ考えて、律歌の口から欲望が零れ出た。

「でも、正直、魔族を見てみたいのよね……」

「見たいの?」

律歌の呟きに恵理は問いかける。

「うん。他にも亜人族も見てみたいし……ぶつちやけさ、人間なんて地球でもありふれているから、それ以外の種族と仲良くなりたい。これ、普通の感情よね?」

「普通だと思う」

恵理の肯定に律歌はウンウンと頷きつつ、怪しい笑みを浮かべて告げる。

「正直、獣耳とか尻尾をもふもふしたい」

「……そう言われると僕も触りたい……もふもふしたい」

「じゃあ離脱ルートでいい？」

「うん、いいよ。どういう感じにやるの？」

「一抜けた、と言っても抜けさせてくれそうにないから、死んだことにするのが一番手っ取り早いかしら。落ちたら死ぬみたいなどころでいい感じにやれば……」

「じゃあ、そうしようか……ねえ、律歌。もしかして、これって駆け落ち？」

「逃げる相手は親じゃないけど似たようなものかもしれない。恵理と2人で誰も知らないところで生活するから……」

その言葉に恵理は満面の笑みを浮かべ、律歌の胸に顔を埋めた。

思いつきり深呼吸を始める彼女の背中を優しく撫でつつ、律歌は呟く。

「水とか食料とか色々欲しいわね……あとオルクス大迷宮っていう大層な名前なんだから、お宝の一つや二つはある筈だし……やばいわ、楽しみ」

モンスターは物凄く強いと思うので、とにかくギリギリまで訓練を頑張ろう——

律歌はそう確信しつつ、仕込みと意思表示は必要だと考えたのだった。

「ふえ？」

畑山愛子は訪ねてきた生徒2人が発した言葉に、そんな間の抜けた声を出してしまった。

その生徒達——北条律歌と中村恵理の顔は真剣なものだ。

「えっと、どうしてですか？ 帰らないって……」

畑山にとって、この2人はどちらも成績優秀であると認識している。

ただ、他のクラスメイトと打ち解けているようには見えず、学校行事などを除けばいつも2人だけで行動していると担任から聞いていた。

かといってクラスメイトと問題を起こすこともない。

教師側からすれば成績優秀で、問題行動も起こさず、クラスメイトと衝突するということもない為、非常に有り難い存在だ。

しかし、畑山も含め学校の教師達は知っている。

律歌の両親から担任が聞いた話によれば、彼女は幼い頃から同世代の子供と比べて並外れた思考力を持っていた、と。

例えば彼女は小学校入学前に自分専用のパソコンを自作している。

自作は簡単だと当時、律歌は言ったとのことだが、学生や大人が言うならばともかく、幼稚園児がそう言うのは異常だ。

そしてインターネットへアクセスできるようになった彼女は、家が近かった恵理と一緒に遊びながら、自分が興味を持ったことを調べたり何だりしていたらしい。

両親も制限するよりは好きにやらせてみよう、という方針であったのも幸いしたのだろう。

そして、極めつけは小学校在学中に受験資格が不要な士業資格を取得したことだ。

当時の新聞に載ったりテレビに出たこともあり、畑山も見た覚えがある。

本人曰く小学生は時間がいっぱいあるから、とのことらしいが、畑山からすれば時間がいっぱいあってもやろうとは思わない。

こういった経緯から北条律歌はギフトテッドだと判断されていたのだが——そんな彼女が地球に帰らないという選択肢を選んだのは畑山としては不思議だった。

進学も就職も、どちらも選り取りなのにと。

その疑問に対する律歌の答えは単純だった。

「将来的には働いて収入を得なければなりません。その場合、人間関

係などがストレスだからです。先生だって、仕事上のストレスはあるでしょ？ 研修に行きたくないとか残業したくないとか……仕事だけど朝起きたくない、休みたいとか」

「……あ、えっと……」

畑山は理解してしまった。

彼女も人間である以上、そういうことがあるのは否定できない。

言葉に詰まる畑山に対し、律歌は告げる。

「私はそういうストレスがイヤです」

「あ、そ、その、あなたならきつとそういうOLみたいなことはしなくても……社長とか……？」

「世界中どんな仕事をしていても、人間と接することを避けられな以上、理不尽なことに遭遇します。まあ、私が大魔王にでもなつて部下をこき使えるような立場になれば、地球に帰ってもいいかもしれないですけど」

ノストラダムスの予言に出てくる魔王かな、と畑山は現実逃避しそうになったが、どうにか踏ん張る。

「ご、ご両親とかは……？」

「帰還したい人達に手紙でも持っていってもらいます。といつても現状ではそもそも帰還する術がありませんし、可能性があるのは神頼みという不確かなものなので帰れない前提で行動するのがみんなにとつても良いのではないかと私は思います。あと恵理の親については知っていると思いますけども……？」

律歌の答えに畑山は焦るが、恵理は平然としている。

中村恵理の事情は入学の際に教師達全員に共有されている。

面談など保護者が必要である場合、未成年後見人である律歌の両親に頼んでいた。

恵理自身が律歌の両親を自らの後見人として候補してもらい、家庭裁判所の審判を経て、正式に後見人となっている。

「律歌、そろそろカミングアウトしよう」

恵理の言葉に畑山はまだ何かあるのか、と身構える。

そして、2人は告げる。



「私は同性しか愛せません」

「僕も同性しか愛せません。僕と律歌は付き合っています」

「……ごめんなさい、ちよつと深呼吸をさせてください」

畑山がそう言ったのも無理はない。

地球に帰らないというのもそうであるが、ここでそのカミングアウトは予想外であった。

「先生、別に無理して何か言おうとしなくてもいいんですけど……」

「そ、そんな無理なんてしてないですよ？」

目が泳いでいる畑山に律歌は肩を竦めつつ、言葉を紡ぐ。

「それと先生、実はまだあるんですけど」

「今度は何ですか？ 先生、もう驚きませんよ」

「イジメの告発です。南雲ハジメ君は檜山大介を含む4人にイジメを受けています。4人組の方は悪ふざけの範疇だと言うこともありますが、明らかに度を越しています」

予想外の告発に畑山はいよいよ困ってしまう。

「どうして今、言うんですか？ こつちに来る前に言ってくれれば……」

「日本ではイジメの加害者に制裁を加えるのは難しいのでは？」

そう言われると畑山も反論できない。

被害者が周りに助けを求めていたとしても、教師が気づかなかつたり、気づいていない振りをしたりという事例が多い。

なあなあで済ませてしまう事例もある。

律歌は更に言葉を続ける。

「私が帰らないという判断をしたのは、そこにもあります。別に私や恵理がイジメを受けていたということじゃないんですけど……台風とか地震とかの自然による理不尽なら、諦めもつきます」

そこで言葉を切り、一拍の間において彼女は言葉を紡ぐ。

「しかし、他者から与えられる理不尽に関しては我慢できるか怪しいです……また同時に自分が他者に理不尽なことをしてしまうのを、私は許せてしまうでしょう。幼稚な独裁者の思考そのまんまですが、私の本質ってそういうものなんだと思います。自分のことは棚に上げ

るというやつです」

そこまで自己分析できちやっっているのかあ、と畑山は遠い目になつてしまう。

しかし、大人として言わねばならない。

彼女は律歌の瞳をまっすぐに見据えて告げる。

「我慢しろ、とは言えません。先生だってそういう経験は色々あります。そういうことは、うまく受け流しましょう。自分の好きなことをやったり、美味しいものを食べたりとかすれば気が晴れますよ」

「……そういうものなんですよね、やはり」

律歌の言葉に畑山は頷きつつ、言葉を紡ぐ。

「理不尽を我慢できないから、と力に訴えるのは駄目です」

畑山の言葉に律歌は伏し目がちとなって沈黙する。

その様子を畑山と恵理は静かに見守る。

やがて律歌は小さく呟く。

「……多少の理不尽に関しては、受け流す努力をします」

「ええ、あなたならできます」

そう言つて微笑む畑山に、律歌はもう一つの要因を述べる。

「色々と言いましたけど、こつちに来て強い力を得たということも大きな要因です。個人の意思一つでこの力は行使できて、制限するのは個人の倫理観や思考・精神状態のみです。外部からの抑止が働かない力ほど恐ろしいものはありません」

そこで言葉を切り、律歌は間をおいて更に続ける。

「地球に戻ったところでこの力が無くなるとは限らないですし、それなら故郷で迷惑を掛けるよりは、勝手に召喚したこつちの世界で色々やった方が意趣返しにもなりますので」

律歌の意思は変わらなかった。

畑山には彼女を説得する言葉が出てこない。

だが、これだけは聞いておかねばならなかった。

「何をしますか？」

「魔法を極めたいです。でもって、就職しなくてもいいこの世界で、恵理と左団扇な生活を送りたいです」

意外と俗っぽい目標に、畑山は思わず笑ってしまふ。

そして、彼女は問いかける。

「就職はしなくても、お金を得る為には働かなければならないですよ？」

「モンスターを討伐するとか大迷宮を探索するとか、地球ではできない仕事はやってみたいです。あと地球で人間はありふれています。この世界には人間以外の種族も多くいます。彼らと交流したいです」なるほど、と畑山は頷いた。

確かに地球ではできないものばかりだ。

「ところで、先生。壁に耳あり障子に目ありという可能性は否定できないですね」

律歌の唐突な発言に畑山はハツとする。

もしかしたら誰かが聞いているかもしれない——

彼女が社会科教師であったことも幸いしている。

ここは現代の地球とは違う。

地球の歴史区分に当てはめるならば、中世時代のヨーロッパに該当するだろう。

王や宗教の権威・権力の強さは現代の地球における比ではなく、迂闊な発言はマズイことになる。

魔族についてどうするか、と畑山は尋ねようと思っていた為、危ないところであった。

そして、律歌が告げた壁に耳あり障子に目ありということわざが、どのようなにこの世界の人間に聞こえるかは不明であるが——意味不明なものに聞こえておいて欲しいと畑山は思う。

「それと天之河君は色々アレです。ああいう性格の人はマルクスやレーニン、あるいはトロツキーの著書を読めばきつと大きな影響を受けるでしょう」

この子はいったい、どこまで考えているんだと畑山は呆れてしまふ。

確かに、彼の性格的にそういう危険性はある。

教師から見ても彼は優秀な生徒であるが、その一方で自分の正義を

信じて疑わない節がある。

彼を利用したい輩が自らを弱者だと偽れば簡単に彼は騙されるだろう。

「幸か不幸か、彼が主導したことで現状はこうなっています。故に、私と恵理はお暇します」

「……はい？」

律歌の言葉に畑山は目を丸くする。

お暇の意味は当然理解できるが、どうしてその結論になるんだろう、というのが彼女をそうさせたのだ。

すかさず律歌は告げる。

「私達は彼の部下じゃないので」

畑山は律歌の言わんとしていることに気がついた。

ただお暇するというわけではないのだと。

畑山は問いかける。

「出奔するということですか？」

「逐電とも言いますね」

2人のやり取りを横で見っていた恵理は思う。

日本語ってスゴいなあ、と。

出奔も逐電も行方をくramsすという意味合いであるが、後者は素早く逃げ出すという意味を含んでいる。

技能：言語理解がどこまで翻訳しているかは不明だが、日本特有の言い回しは有効な対策ではないかと恵理は思いつつ、2人を見守る。

「どのようによ？」

「分かりやすくいえば、ヒトラーが南米にいたというやつですね」

「ああ、そういうことですか……」

ベルリンで死んだヒトラーは影武者で、本物は南米に逃れていた――死を偽装したというのはよくある陰謀説だ。

畑山は2人が死を偽装するのだ、と確信する。

こればかりは地球の歴史などを知っていなければ意味が分からないだろう。

「話が前後しますけど、南雲君はオルクス大迷宮に行かせない方がいいかもしれないです。そもそも彼は戦闘職ではなく生産職です。旧軍のようなことになっては駄目ですから」

律歌の例えを理解し、畑山は頷き答える。

「彼に関しては他の錬成師の方々と交流したほうが良いかもしれません」

「そちらの方が明らかに良いです。それと先生、私達の件をうまく使ってください。警察案件ではなく自衛隊案件だとかそういう風に伝えれば……」

律歌の言葉に畑山は大きく頷いた。

「うまく話を盛っておきますね。あ、それと手紙の件、よろしくお願います。勿論、あなた達の気が変わったら……いつでも構いませんよ」

畑山の言葉に律歌は頷いたのだった。

## 落差が酷い話

北条律歌と中村恵理が65階層にてベヒモスと共に落下し、生存は絶望的——

その事実にはクラスメイト達の心に重く押し掛かった。

律歌と恵理が基本的に2人だけで行動し、他のクラスメイト達は少しばかり距離を置いていたものの、かといって孤立しているというわけでもない。

グループワークや班分けなどでは他のクラスメイトからは誘われる存在だ。

この一件を利用して、畑山愛子は生徒達にどういう状況であるのかを伝えねばならない。

彼女は生徒達を全員——発端となった檜山も含めて——集めた。

「先生から皆さんにお話があります」

暗い顔をしている生徒達に畑山はそう切り出し、結論から告げた。

「困っている人を救うというのは素晴らしいことですが、それにも限度というものがありません。誰も彼も救えるというのは、それこそ全知全能の神様くらいなもので、あなた達はそうではありません」

そこで畑山は言葉を切り、ゆっくりと告げる。

「滅亡の危機にあるこの世界の人達を救う……私達にはその力があるとのことでしたが、現実はどうでしょうか？ 今回だけでなく、今後魔族との戦いに本格的に参加すれば、取り返しのつかない怪我を負い、最悪死んでしまうかもしれません……仲間達を失ってもなお、この世界の人々の為に戦えますか？」

畑山は生徒達を見回しながら、この世界における魔族と人間族の戦争について述べる。

「長年争っている魔族と人間族は、どちらかの勝利が確定的となっ

た場合、話し合いによつて講和ができるでしょうか？ 積み重なった憎悪がちよつとやそつとでは無くならないことは、地球の歴史でも明らかです。どちらかがどちらかを完全に滅ぼす……絶滅させるまで戦いは果てしなく続くかもしれません」

そこで一度言葉を切り、畑山は少しの間を置いて告げる。

「この世界の状況を召喚当初よりも詳しく知った今、先生は改めて戦争への参加は反対です。これは武力によつて解決する問題ではなく、種族間対立やそれに伴う歴史的背景、宗教までも複雑に絡み合った問題です。これらは、この世界の人々が時間を掛けて解決しなければならぬ問題であり、部外者の私達が安易に手を出して良いものではありません」

畑山はそこで生徒達の様子を見ながら、締めに入る。

「私達は高校の教師と生徒でしかなく、このような複雑で根深い問題を解決する方法は持っていません。もしも、解決方法を皆さんの中の誰かが持っていたならば、アフリカや中東の問題を解決できます。そうなればノーベル平和賞は確実に、地球の歴史に残る英雄になるでしょう」

そして、彼女は口を閉じた。

今の彼女には普段の愛くるしい姿はどこにもない。

生徒達は誰もが押し黙つたままであり、それは最初に魔人族との戦争参加を表明した天乃河光輝も例外ではない。

また檜山大介は自分の行動が結果として2人を死に追いやった、という事実がある為、今にも自殺しそうな程に顔色が良くない。

彼らも含めて生徒達に対して畑山は罪悪感を覚えてしまう。

2人が偽装死であることを彼女は知っていた為だ。

「各自、よく考えてみてください。それでもなお戦争に参加するといふならば先生は止めません。ですが、それは自分自身の命を参加料金にしているのだと思ってください」

そう言いながら、死んだことになっている2人について思いを馳せる。

今頃オルクス大迷宮を探索でもしているんだろうか——？

畑山はそんなことを考えつつも、檜山大介と天之河光輝の両名についてはいきめ細かなケアが必要だと確信する。

彼らと仲の良い生徒達に協力してもらおう、と彼女は考えるのだった。

一方、律歌と恵里はというと畑山の考えた通りにオルクス大迷宮の奈落の底でも言うべき場所を探索していた。

檜山が発動させてしまい、全員が巻き込まれた転移トラップ。

転移先となった65階層の橋の上にて、2人は他の誰よりも早くベヒモスの足止め役を買って出た。

そして、うまく橋を破壊してベヒモスごと落ちた——というのが真相である。

この時、律歌は恵理を抱きかかえて、魔力を放出して——足とかお腹とかは勿論、尻からも出たのはご愛嬌——推進力とすることで落下速度を減じていた。

魔力操作及びその制御ができる律歌だからこそその芸当であり、また彼女がこれまで空を飛ぼうとして睡眠時間を削って練習をしていたのも幸いした。

空を飛ぶ練習をしていたのは、飛行ができれば便利であることは勿論、密かな野望への第一歩であり、その野望は魔法を極めるという目標にも通じている。

高高度を超音速で飛びながら核攻撃を乱発——

その野望を諦めていなかったが、無音とはいえ尻からも魔力が出たことは早急に改善が必要だと律歌は確信していた。

「はい、ご苦勞さん」

唸り声を上げてモンスター達が襲ってくるものの、律歌によって一撃で処理される。



人差し指を相手に向けて、そこから圧縮した魔力の弾丸を高速で撃ち出す。

敵がたくさんいるなら10本の指からマシンガンの如く撃ち放つことも可能だ。

律歌が私の両手はマシンガンと言ったならば、恵理が指先を切り落としてないじゃん、とツツコミを入れるなど非常に和やかな雰囲気であった。

「しかし、地下水脈があるせいか、湿気がスゴいわね。持ってきたのがランタンじゃなかったら大変だったわ……値段は松明よりも高かったけど」

「うん。でも、いかにもって感じだよ。絶対お宝がたくさんあるよ」そんな2人の後ろをぞろぞろと付き従うモンスターの群れ。

それらは既に死んでおり、恵理の魔法によって操られている状態だ。

これに加えて、恵理が実験している魂を縛るオリジナル魔法を使えば、かなり悪いことができるんじゃないかと律歌は思っている。

「……恵理の魔法を使えば世界征服も可能じゃない？ 表に出ず、権力者達をあなたが操るって感じで」

「律歌がそうしたいなら、僕はそうするよ。あ、サプライズってことでこの世界を君にあげてもいいかも」

「世界をプレゼントしてくれるとか、ちっこいのにスケールがかい」頭一つ分くらい、恵理の方が律歌よりも身長が低い。

むーっと恵理は頬を膨らませ、律歌へ飛びついてポカポカと殴る。「ちっこくないもん！」

「同志ちっこいの」

「律歌がでっかいだけなの！」

「かわいい」

ランタンをそこらに置いて、恵理を抱きしめる律歌。

抱きしめられると満足して、恵理は機嫌を直す。

そんなことをしながら、2人は歩みを再開する。

程なくして、律歌が鼻歌を口ずさみ始める。

その曲名を恵理は知っていた。

恋人の趣味や嗜好を完璧に把握するのは彼女にとって当然なことであり、それが愛の深さに繋がると考えていた。

「インターナショナル？」

「インターナショナル。私達って状況的には王や宗教に背を向けるっていう、この世界の人からすると不屈きなことをしているので、ピツタリなんじゃないかな……」

「この共産趣味者め」

「もしかしたら、この世界なら永続革命ができるかも……？ トータスのトロツキーに、私はなるっ！」

「死因がピツケルになりそうだから駄目」

「ですよー……ただ、革命の可能性はある。対外戦争をしている最中って、税金やら何やらが国民に対して重くのしかかってくるから……帝政ロシアでもそうだったけど、この国ではそこまで不満が溜まっているようにも見えないので、何とも言えない。やるなら仕込みが必要だわ」

「どうして僕の恋人は革命家になろうとしているのかな？」

恵理は背伸びして律歌の頬をぐにぐにと引っ張る。

愉快な顔になる彼女を恵理はけらけら笑って頬から手を離す。

「まあ、革命に関しては国と教会がちよっかい掛けてきたらにするわ。やられたらやり返すくらいならセーフ」

「うん、そうしなよ。僕もその頃にはもっともっと強くなっているからさ」

そんなやり取りをしながら、2人はマツピングしつつ下を目指して歩いていると魔力感知に引っかかるものがあった。

モンスターの魔力よりも反応が非常に大きい。

何なんだろう、と2人は疑問に思うも、そこに辿り着くには幾つもの岩を除去しなければ無理そうだ。

とはいえ、岩の隙間から漏れ出てくる水のような液体は魔力を帯びていることが魔力感知によって分かる。

「恵理、任せた」

「うん、任せて」

恵理はモンスター達を動かして、岩の除去を始める。

バケツリレーの要領でどんどん岩を運んでいく。

途中、岩が崩れてモンスターが何匹か下敷きになっても、既に死んでいるので大丈夫だ。

見た目がグロテスクなことになったが、作業に支障はなかった。

短時間で作業が完了し、2人が見つけたものは——青白く、神秘的な輝きを放つ鉱石であり、石からは液体が流れ出している。

液体が魔力を帯びているのは、その水源である鉱石が莫大な魔力を内包している為のようだ。

「恵理……」

「律歌……」

互いに名前を呼び合い、ハイタッチ。

遂に見つけたお宝だ。

喜びつつも律歌と恵理は鉱石から流れ出る液体を観察する。

魔力を含んでいること以外は普通の水のような感じだ。

「モンスターに飲ませて毒味役をさせるってどう?」

「判別法としては信頼できないかな。せめて普通の動物が欲しい」

問いに恵理は答えると、律歌は腕を組んで悩み——やがて意を決して告げる。

「ちよつと触ってみる」

「危険じゃないかな?」

「触った瞬間死ぬような危険なものなら、私達はもう死んでいるわ。水滴が付着しているし」

律歌はそう言いながら、指先で液体に僅かに触れて、すぐに指を離した。

刺激や痛みなどは感じない。

指先に僅かについている液体を舌で舐め、ゆっくりと嚥下する。

その瞬間、律歌は感じた。

力が漲ってくるのを。

「……ねえ、恵理。これってあれだわ、ゲーム的に言うならば回復ポイ

ントだわ。それも魔力も含めて回復するやつ」

「マジ?」

「マジ。飲んでみて」

律歌に促され、恵理もまた液体を指先につけてそれを舐めて、ゆっくりと飲み込んだ。

そして、律歌の言葉が本当であることを体感する。

「……律歌、どうする?」

「勿論、決まっているわ……レベリングしよう。もしかしたら、これの回復効果次第ではモンスターを食べても大丈夫かも……」

「さすがにゲテモノ過ぎない? あとモンスターを食べると身体がロボロになって死ぬみたいだし」

「もしかしたら、それもパワーアップ手段ではあるかもしれない……とりあえず、レベリングをやろう。ある程度のところまで切り上げる必要があるけども」

「さすがに食料になりそうなものって、こんなところにはないからね」  
「ええ。念の為にこの水がどこまで回復するか、できる範囲で検証してみましようか」

律歌の提案に恵理は頷いた。

そんなこんなで、2人はレベリングを始めるのだった。

## 大きな動き

「アイタタタツ……！ は、腹がツ……！」

お腹を両手で押さえて転げ回る律歌に恵里は言わんこつちやない、と肩を竦めつつ、彼女を止めて魔力すらも回復するスゴイ水を口移しで飲ませる。

スゴイ水には神水という名前があるのだが、2人は知らなかったのでエリクサーと律歌によって命名されていた。

その神水こと、エリクサーを飲んで律歌はようやく落ち着きを取り戻す。

「どうだった？」

「恵里が作ってくれたので、最高に美味しかった。調味料をホルアドで購入しておいて良かったわ」

満面の笑みを浮かべて親指を立てる律歌に恵里は満足げに頷いた。

だが、彼女が聞きたかったのはそこではない。

再度、恵里は問いかける。

「モンスター、やっぱり食べない方が良かったよね？」

「エリクサーのおかげで大丈夫だわ」

そう言いながら律歌はステータスプレートを取り出して確認し、恵里にも見せた。

それを確認する限り、ステータスの大きな上昇と食べたモンスターが使っていたと思われる固有魔法が技能欄に現れていた。

しかし、それだけではなく吸収という技能もまた現れている。

そんなものを使ってきたモンスターはいない為、モンスターを食べるという行為自体が何かしらのトリガーになったのかもしれない。

「吸収ってラーニングのことかしら？ やっぱりゲテモノ食いはパワーアップ手段だった」

「……良いこと尽くめだけど、本当に腹痛だけだったの？」

ジト目で問いかける恵里に律歌は胸を張って答える。

「実は今も物凄く痛い。具体的に言うとなんが複雑骨折した上に、上からお相撲さんが10人くらい落ちてきてピョンピョン飛び跳ねている感じ。でも恵里の前だから頑張れる」

「致命傷だよ!?!」

「エリクサーを飲ませてくれれば大丈夫。エリクサーを信じろ……」

律歌の言葉に恵里は再度、口移しにてエリクサーを飲ませる。

その行為をしばらく続けていると、合間に律歌は問いかけた。

自分が人外の存在へなったのではないかと感じていた為だ。

「見た目の変化とか何かある?」

「特にないよ。腕とか足とか触手とかそういうのは生えてない。髪色とか瞳の色も変わってない。全体的に筋肉がついたくらいだけど、ムキムキのマツチョって感じじゃなくて細マツチョってやつ。律歌の変化には敏感な僕が言うんだから安心して」

「元々魔力を直接弄ることができた為かしらね……魔力を使って身体強化とかもできたし、そういうのに耐性があつたっていうか、そういう構造になつていたという感じなのかな。知らんけど」

その時、律歌はもしやと思つて自分のスカートを捲つた。

突然の行動に首を傾げなら恵里は尋ねる。

「どうしたの?」

「もしかしたら両性具有になつてるかと思つたけど、そんなことはなかった」

律歌の言葉に恵里は彼女へ抱きついて、耳元で囁く。

「えっち」

「恵里つてば本当に可愛い」

よしよし、と律歌は恵里の頭を撫でつつ提案する。

「恵里もパワーアップしてみる?」

「……さすがに僕はやめておくよ」

「エリクサーを飲めば物凄く痛いだけで死なないし、恵里には強くなつて欲しいし、もしかしたら私は恵里よりも長い寿命を得てしまつたかもしれないから……」

そう言いながら、律歌は恵里を上目遣いで見つめる。

彼女に対して恵里は問いかける。

「律歌は恋人に苦痛を味わえつて言っているんだよ？ 普通、そういうことは言わないんじゃない？」

「……恵里の言っていることは至極真つ当なんだけど、将来ピンチになった時、食べておけばよかったみたいなことになりそう。よくあるじゃない、そういうのつて」

律歌の指摘に恵里は渋い顔になって告げる。

「そんな漫画みたいなきっかけが起きるわけがない……つて否定したいけど、僕達のこれまでの経緯から考えると否定できない」

「……どうする？ 私が食べた方がいいんじゃないかって勧めた理由はさつき言った通り。代償は物凄く痛いことと身体とかに変化があるかもしれないこと。別に食べなくてもあなたに対する思いが変わることはない」

律歌は恵里の瞳を真つ直ぐに見つめてそう言い切った。

その言葉に対して、恵里は溜息を吐く。

「そういう言い方、本当にずるいよお。断れないじゃん。実質的な強制じゃん」

「駄目かしら？」

「駄目じゃないよ。律歌が僕のことを考えてくれているの、すごく嬉しいもん」

そう言つて恵里は決意する。

「僕、食べるよ……！」

「私が口移しでエリクサーを飲ませ続けるから何とかなる……安心して」

律歌の言葉に恵里は俄然、やる気を出した。

そして、2人は適当なモンスターを仕留めて、それを律歌が調理する。

恵里の為に彼女は愛情と調味料を込めて、程よい火加減でじっくりと骨付き肉を1本、焼いた。

肉汁が滴り、食欲をそそる香りが辺りに立ち込める。

見るからに美味しそうだが、先程も見た目は良かった。

恵里は意を決して齧り付いた。

調味料のおかげか味も悪くはないが、危険であるのは律歌が身をもって証明している。

さっさと食べ終えてしまった方が良いと判断した恵里は、一心不乱に咀嚼して嚥下していく。

程なくして恵里の身体に痛みが走り始めるが、それが本格化する前に彼女は食べ終えた。

すかさず、口にエリクサーを含ませていた律歌が恵里に口移しでもって飲ませる。

エリクサーを口に含んでは恵里へ飲ませ続けて、しばらくして恵里の痛みも収まっていく。

そして、律歌は落ち着いたところで恵里の身体を確認する。

「腕とか触手とか生えたりしてない……髪色とかその他色んなものに変化がない……あ、でも身長が伸びたような……」

「身長が伸びたって？ やっぱり律歌の愛の力かなあ。でもあんまり変わった気がしない……本当に伸びたの？」

「数cmとかの伸びじゃないわ。何となくさつきよりもちよつとだけ大きくなっているような気がする。愛もそうだけど、エリクサーを飲ませ続けたのが良かったのかしら。エリクサーが少量摂取だったら、もっと大きな変化が起きていたのかも」

そう予想する律歌の背中へ恵里は両手を回し、その耳元で囁く。

「ねえ、律歌。分かっているんでしょ？ 僕達、人間じゃなくなっているよ」

「何となくそんな気がしていたけど、やっぱりそうなのかな？」

「きつとそうだと思うよ。ステータスが上がったとか技能が増えたとか……そういうのだけとは思えないもん。あと魔力ってこういう感覚なんだね」

そんなことを言いながら、恵里は律歌の首筋に口づける。

そして、囁く。



「身体が軽いし、力が漲ってくる……あと律歌と同じような感じで筋肉がついてるよ」

「……痛かったけど、体脂肪を撃退できたって感じかしら」

「体重は筋肉分、増えたと思うけどね。そんなことよりさ、せつかく2人で生まれ変わったんだから、記念に……」

最後まで言うことなく、恵里はにつこりと笑ってみせる。

律歌もまたそれは望むところであった。

王国にて畑山愛子は戦争への参加ではなく、人道支援として王国内における農地開拓を目指して動いていた。

精神的なショックを受けた生徒達を戦争へ参加させることなく、また王国・教会からの何もしていないという批判をかわす狙いがある。

もつとも王国や教会からの批判については、まだ聞いたことはないが何もしないままでは将来的にそうなる可能性は高いと彼女は判断していた。

幸いにも彼女の天職は非常にレアなものであり、その有用性は王国・教会だけでなく彼女自身も理解していた。

その一方で畑山は1日に2回は生徒達を全員集めて、ホームルームのようなことを行い、また個別面談も順次行っている。

これは生徒の心のケアの為であり、全員が対象だ。

慣れない仕事ばかりであったが、生徒達が極端な考えに走らぬよう、彼女は四苦八苦しながらも取り組んでいた。

普段は彼女のことをからかっている生徒も多いが、流石に今回はそのようなことをする者は誰もいなかった。

さて、南雲ハジメは夕食後に畑山との個別面談を終えて、自室のベッドで横になってぼんやりと天井を眺めていた。

「これから……どうなっちゃうんだろうな」  
ぼつりと呟く。

あの日以来、クラス内の雰囲気は変わった。

もう帰れないんじゃないか、という思いが誰の胸にもあり、クラス  
の中心人物である天之河や2人を死に追いやるきつかけとなつてし  
まった檜山が酷く責任を感じて、精神的に不安定になっている。

この世界の人々を救うために戦争へ参加するなどと言わなければ  
——  
自分をもつと気をつけていれば——

そのような言葉を口にして嘆き悲しむ様を見ると、天之河も檜山も  
召喚前と比べて別人のようだ。

特に檜山はハジメにちよつかいを掛けてくることがなくなった。  
だが、イジメが無くなったことを喜べるような状況ではない。

ハジメは当時、あの場にはいなかった。

畑山の勧めもあって、彼は王国お抱えの錬成師達に授業をしても  
らっていた為だ。

2人が死んだという実感がわかず、どつかで生きているんじゃない  
かと思えてしまう。

そのとき、扉が軽く叩かれた。

あの日以来、毎日彼の部屋を訪れる人物がいる。

故にハジメは特に驚くこともなく、ベッドから起き上がって扉を開  
けた。

「こんばんは、ハジメ君」

ここ最近、下の名前で呼んでくるようになった白崎香織その人だ。

「こんばんは、白崎さん」

ハジメの言葉に香織は頬を膨らませる。

その表情に彼は思わず見惚れてしまう。

可愛いな――

そんなことを思っていると彼女は告げる。

「ハジメ君、香織って呼んでくれなきゃ駄目」

「か、香織さん……?」

「……今はそれで我慢してあげる」

今はって何だよ、とハジメは恐れ慄きながらも、彼女を部屋へ招き入れる。

彼女は椅子には座らずハジメのベッドに座って、その横を手で軽く叩く。

彼はそれに従って横に座り、そこから会話がスタートするというのがここ最近のルーチンだ。

何でこんなことになったんだ、とハジメとしては不思議でしょうがない。

最初の日はちよつと相談に乗って欲しいってやってきたのに、ドラマティックな変化である。

とはいえ、彼とて男子高校生だ。

ここまで露骨にアピールされて気づかないわけもない。

理由は不明だが、白崎香織は自分に惚れているんじゃないかと予想するには十分だった。

かといって告白する勇氣は今の彼には無い。

「ハジメ君、律歌ちゃんと恵里ちゃん、生きていると思う?」

おっと今日はいきなり変化球だぞ、とハジメは思いつつも答える。

「正直、死んだっていう実感がわからない。実はどっかで生きているんじゃないかって思うときもあるかな……」

「だよな。私もそう思う。生きている証拠とかそういうのは何にもないんだけど……あの2人ってしぶとそうだから」

「もしかして、死んだように見せかけたとか?」

彼が何気なく問いかけると、彼女は食いついた。

「ねえねえ、やっぱりあの2人ってデキてるよね？ だから駆け落ちしたんじゃないかなって私は思っているの。前々から噂になっていったんだ。校舎裏で2人がキスしてたのを見たって子もいるし……」

「ちよつと待った。何だその噂は……？」

「え？ 知らないの？ 男子達もわりと知っているらしいんだけど……？」

「知らなかったんだけど……」

ハジメはそう答えて、自分の学校生活がどうであつたかを思い返す。

クラスメイト達との接点がない。

香織が常日頃から指摘してくれていたのに、それを改善することもなかった。

他者との接点が無ければ情報が入ってくることもない。

趣味の合間に人生を掲げている彼はオタクである。

オタクな彼はオタクではない人々よりも、ディープな情報収集を欠かしていない。

某巨大掲示板をはじめとして、あちこちのサイトを彼は常日頃巡回していた。

そんな彼は無駄に知識もあり、またネット上でのスラングも多く知っており、その中には現在の自分をよく表現したものがある。

趣味の合間に人生、趣味の為に色々切り捨てる——大いに結構、

その覚悟は称賛に値する。

自画自賛だけでも。

だが、これって周りから見たら——単なるコミュ障ボツチでは？

気づいてしまった南雲ハジメの衝撃は大きく、項垂れてしまう。

急に落ち込んだ彼に対して香織は迷う。

今ならばチャンスではないか、と彼女は直感したのだ。

落ち込んだ彼を慰めて好感度アップという魂胆であるが、ここは大

胆にいったほうが良いのではないかと彼女は思う。

自らの心臓が早鐘を打つのを香織は感じた。

どうする？ どうする？ いっちょやおう——！

逡巡していた彼女は決意し、行動する。

そして、白崎香織は南雲ハジメに横から抱きついた。

「ちよっ!? えっ!?!」

ハジメは混乱するが、ここまでできたならば最後までいってしまえと香織は決心して、抱きついたまま告げる。

「あなたのことが好きです……私と付き合ってください……!」

一世一代の香織の告白に対してハジメは理解が全く追いつかない。何がどうしてそうなった、と彼は声を大にして問いかけたいが、それは最悪の手であることは考えるまでもない。

南雲ハジメは白崎香織をどう思っているのか。

好きなのか嫌いなのか、男女の仲として付き合うか付き合わないかという二択である。

そんなのは決まっていた。

ここで断る奴は男じゃない。

「自分でよければ……よ、よろしくお願いします……!」

「ハジメ君じゃないと駄目だよ」

香織はそう告げて微笑みながら、きつかけを話し始めた。

中学の頃にお婆さんと孫を不良達に土下座して守ったということを知り、ハジメはそんなこともあったなあ、と思い出す。

しかし、その直後に続けられた香織の言葉に彼は耳を疑った。

「他校の生徒だったハジメ君だけ……私は制服から学校を特定したんだ」

「えっと……マジで?」

「マジだよ。他にも色々あるよ? 昔から私はハジメ君のことが好きだったの」

満面の笑みで香織にそう言われて、ハジメはもしやと思う。

「……香織さんって、もしかしてストーカー的な？」

「違うよ。それに、好きな人のことは何でも知りたいっていうのは、普通の感情だと思う」

これは自分がおかしいのか、とハジメは思わず首を傾げてしまう。

そのとき、扉が叩かれる。

ハジメが問いかければ八重樫雫だという。

彼は香織へ視線を向けると、小さく頷いた。

それを見て彼は立ち上がって——当然のように香織も一緒に立ち上がり、くっついてくる。

「香織さん、離れてくれると……」

「だーめ」

「あつはい……」

ハジメは渋々そのままの状態扉を開けた。

八重樫雫は2人の状態を見て微笑んだ。

「香織、おめでとう。頑張ったわね」

「えへへ、ありがとう」

はにかんだ笑みを浮かべる香織から雫は視線をハジメへ向ける。

「南雲君……香織を泣かせたら、大変なことになるから」

「き、肝に銘じておきます！」

ハジメはそう答えることしかなかった。

封印されし少女に捧げるはサソリの丸焼き　なお、拒まれる模様

モンスターを食べてパワーアップとかいう、斜め上の強化方法を得てしまった律歌と恵里。

これによって2人は自らの力を増強するというだけでなく、同時に食糧問題も解決してしまった。

そして、始まったのはモンスターの乱獲である。

もつとも、ただ肉を食べるといっただけでは飽きてくる為、色んな部位を調理した。

ほどなく調味料が尽きたが、それでも空腹であればそれが最高の香料である。

なお、バジリスクの肉だけでなく目も食べたら石化耐性と共に石化の魔眼を得てしまったのは嬉しい誤算だ。

通常時は瞳の色は変わらず、石化能力を行使したときだけ瞳の色が金色となる為、律歌は悪さができると喜んだのは言うまでもない。

ともあれ2人はいちゃつきながら、鍛錬してモンスターを食べるといっ非常識な状態であったが、どちらも大満足であった。

もう一生ここで暮らしてもいいかもと思ってしまう程であったが、重大な欠点が存在している。

魔法に関する知識がまったく得られないことだ。

自己流で修行方法を考えてみたものの、偉大なる先人達が脈々と受け継ぎ発展させてきたものには到底及ばない。

故に、2人はこれまでに学んだ基礎的な訓練——特に魔力量を増大させる瞑想や、かつて律歌が失敗した指先に魔力を集めて逆立ちをするということも行っていた。

魔力量が多いだけでなく、それを十分に使いこなす為には精密な操作・制御が必要であるという律歌の考えによるものだ。

他にもこちらで覚えた魔法の訓練も行っている。

そんな風に過ごしていたのだが、律歌のとある欲求でこの生活は終

わりを迎えた。

その欲求とは——食欲であった。  
モンスター以外のものが食べたくなつた律歌は恵里に提案したところ、彼女もその提案を快諾する。

しかし、せつかくこんな深いところにいるので、金目のものを探してみようという考えに至つた。

単純に脱出するだけなら邪魔なものを魔法でぶつ壊して上へ向かうだけでいいが、改めて探索の為にここまで来るのも面倒くさい。

そんなこんなで2人は探索を開始し、下へ降りるところを見つけてはどんどんと下へ向かつたのだが——かなり深く降りたところで人工的な扉を発見する。

意気揚々と扉を開けようとした律歌の前に現れて襲いかかる1つ目の巨人。

巨人は2体であつたが、こんがり焼かれてその場で律歌と恵里に美味しく頂かれたの言うまでもない。

そして、扉の先にいたのは——身体の半分程が石に埋まつた少女であつた。

少女は掠れた声で問いかける。

「誰かいるの……?」

律歌は状況を完全に理解し、うんうんと頷いて得意げな顔で問いかける。

「石の中にいるってやつね。宝箱に仕掛けられていた転移魔法にでも引つかつたの?」

「律歌、たぶんだけど違うと思う」

「え、違うの?」

律歌の問いかけに少女は困惑しながら否定する。

ならばと律歌は問いかける。

「封印を解いたら、お礼にお前達を食らつてやろうとかそういうパターン?」

「違う……! 私には裏切られただけ……!」



少女の言葉に律歌は察する。

「権力闘争に敗れたパターンね。どうかしら？ 私と一緒に革命を起こさない？ 腐敗したブルジョワ達を一層し、新たな秩序を構築するっていうのは……」

「律歌、思考が革命家になっている。とりあえず、彼女の詳しい話を聞いてみようよ」

恵里の言葉に律歌は頷いて、口を閉じた。

それを見て、変な2人組だと少女は思いつつもゆっくりと自らの経歴や能力について語り出す。

それは簡潔なものであり数分と経たずに語り終えた少女は最後に告げた。

「お願い……ここから出して……何でもするから……」

「ん？ 今、何でもするって……？」

律歌は目を輝かせて問いかけるが、少女はそれを肯定してしまう。

「あなた達の力になれると思うから……」

うんうんと律歌は頷いて叫ぶ。

「シンキングタイム！」

「え、あ、うん……？」

律歌の叫びに少女は困惑しながら、とりあえず頷いた。

すると律歌は恵里を引っ張って、部屋の隅っこへ。

そういう対応をされると少女としても気になるので、全神経を耳に集中させる。

幸いにも彼女達の会話以外、音といえば呼吸音くらいなものなのでどうにか会話が聞こえてきた。

「どうっ？」

「同性愛はこの世界でも特殊みたいだけど、万が一ってこともあるから僕は反対」

「それはそうなんだけど、蓄えた知識とかありそうだし……仲間にしておいて損はなさそう」

「うーん……そう言われると……実利を取るか、感情を取るかなんだ

よね」

「普通に接していれば大丈夫じゃない？」

「そうだよねえ……」

何だかよく分からないが、とりあえず助けに来てくれそうだと少女は安堵する。

そして、2人が隅っこから少女のところへ戻ってきた。

「助けてあげるから、何でもしてくれるのよね？」

「……私にできることなら」

「じゃあ、とりあえずあなたの肉を食べさせてよ。私達、ここまでモンスターを食べて、その技能を頂いてきたのよ。それに食べるとステータスの上がり幅もスゴいわ」

律歌の言葉に少女は目を数回、瞬きさせる。

「えっと……人間？」

「人間だったけどたぶんもう人外じゃないかな……よろしく、人外の先輩さん」

にっこり笑顔で律歌にそう言われて、とんでもない連中に助けを求めてしまったのではないか、と少女は思ってしまう。

とはいえ背に腹は代えられない。

「分かった。でもあんまり痛くしないでね……う？」

「大丈夫、ちよびつとだけだから。とりあえずトラップを警戒しつつ、その石をぶっ壊しましょうか。魔法で構築されているっぽいから大量の魔力を流し込めば破壊できるはず……たぶん」

そこはかとなく不安しかなかったが、少女は2人に任せることにした。

そして、律歌の予想通り封印を破壊した直後——彼女と恵里の気配感知及び魔力感知に引っかかった。

律歌は叫ぶ。

「上から来るぞ！ 気をつけろー！」

「人海戦術だよお」

恵里の声と共に、扉の前であらかじめ待機させていたモンスターの

死体達が入ってきた。

突如として現れたモンスター達に少女は驚愕するが、そのモンスター達が死体であることで更に驚いた。

そんな少女に律歌は告げる。

「恵里の魔法よ。彼女は降霊術師なの」

「そうなんだ……」

上からやってきたサソリのようなモンスターに殺到するモンスターの死体達。

その数は多く、サソリが溶解液で溶かそうが、4本のハサミで薙ぎ払おうがどれほど攻撃を加えてもモンスター達が途切れることはない。

多数の死体を同時に操るのは生半可な腕ではなく、高位の降霊術師であると少女は予想する。

そこまでの時間を掛けることなく、サソリのようなモンスターは息絶えた。

「というわけで、3分クッキングのお時間です。今日の食材は恵里が仕留めたサソリですが……生き物は焼けば何とかあります。最悪の場合、エリクサーを小瓶に入れて持ってきているので大丈夫でしょう」

まるで少女への説明のような律歌の言葉。

そして、モンスター達を操ってサソリを解体し始める恵里。

言葉を聞き、行動を見て少女は顔が引きつった。

「食べるものじゃないと思う……」

そんな言葉が彼女の口から出るのも当然だが、律歌はドヤ顔で告げる。

「これも貴重なタンパク源です」

「限度があると思う……」

少女はそうツツコミながら、あることに気づいて問いかける。

「……もしかして、私も食べるの？」

「え？ 食べないの？ モンスターを食べるとパワーアップできるわよ？ 最初は死ぬほど痛いけど、あなたなら自前の再生力で何とかな

るんじやない？」

「絶対に食べない……！」

少女は律歌に拒絶の言葉を告げる。

しかし、律歌は諦めない。

「色んなモンスターを食べ続けたおかげか、最近は私も恵里も食べても痛みが無くなったわ。さっきも言ったけど、このおかげでステーキタスも技能もすごいことになっているんだけど……？　どう？」

「たとえ利益があるにしても……私は絶対に食べない！」

少女の意思は変わらないのだった。

## 思想の麻薬

「ところで律歌の共産趣味って、僕にも適用されるの？ 降霊術って使役される側からしたら、僕は倒すべきブルジョワにあたるのかもしれない」

下への通路を探して歩いていた時、何気なく恵里が律歌へ問いかけた。

つい最近仲間になった封印されていた少女——ルナは聞き慣れない単語があつたが、2人の会話に耳を傾ける。

「死体が意思を持って、労働者階級として自覚し出したらワンチャン……まあ、そんなの関係なしに恵里のことは私が守るけどね」

「えへへ」

そのように言われて、はにかんだ笑みを浮かべる恵里の頭を撫でながら、律歌はルナへ問いかける。

「ただ、死体が自分の意思を持つってそれって吸血鬼への第一歩だと思うんだけど、そこんところどう？」

その質問にルナは答える。

「そういう形で吸血鬼が誕生するっていうのは聞いたことがない……ただ、降霊術師の制御を外れて死体が暴れ出したり、制御を外れた死体が意思みたいなものを持ち始めてモンスター化するっていうのは聞いたことがある」

「さすがはルナね。博識だわ」

「うん。スゴイと思う」

2人から褒められると、ルナとしても気分が良い。

しかし、彼女にとって2人の間で行われる会話の意味を正確に理解することは、地球のことを詳しく知らない為いささか難しい。

恵里が更に律歌へ問いかける。

「イデオロギーを曲げると批判されるっていう傾向が強いらしいけど……？」

「そもそも私は共産主義ガチ勢じゃないので、恵里と革命どっちか選べって言われたら、迷わず恵里を取るわよ」

そこで律歌は言葉を切り、少しの間をおいて告げる。

「それに共産主義の伝家の宝刀、共産主義者がやることはどんなことでも人民にとって善であり、資本主義者がやることは人民にとって悪という素晴らしい論法がある。今回なら恵里は私にとって大事な同志であり、彼女は革命達成の為に必要不可欠とすればいいわ」

「……共産主義がどのような主義主張かは分からない。でも聞く限りだと、自分達にとって都合の良い理論を振り回しているだけに聞こえる」

ルナの言葉に対して律歌は答える。

「まさしくその通りなのよ。この論法を使用すると、主義主張とは何も矛盾しないということになるわ。主義主張自体も耳聞こえの良い言葉を並べておけば批判もされにくいからね……この論法は都合が良いので、私も形を変えて使いたいと思う」

「地球って摩訶不思議。あと使わなくていい」

そのやり取りを聞き、恵里は問いかける。

「改めて聞くけど……律歌、どうして共産趣味になったの？」

「独特の雰囲気と何とも言えぬ浪漫があるのよ。共産主義に限らないけど、やっぱり全体主義って一種の麻薬だわ」

「さすがの僕も理解が追いつかない……僕は律歌ガチ勢なのに、悔しい……！」

悔しがる恵里をよしよし、と慰めながら律歌はあることを思い出す。

「そういえば、ルナの名前に関してなんだけど……やっぱりクラスナヤ・ズヴェズダーにすれば……」

「その単語にはどういう意味があるのかは分からないけど、今の名前が決まって良かったことだけは分かる」

「赤い星って意味よ」

「意外とマトモ」

「そうでしょ？ 改名する？」

「言いくらいから、ルナでいい」

「それは残念だわ」

そんなこんなで3人は迷宮を進んでいく。

このとき、3人に出会ってしまった不幸なモンスターの中にはアラウネっぽい他者を操る植物系モンスターがおり、久しぶりの野菜として律歌と恵里は喜んだ。

ルナは幸いにも血を吸えば問題ない為、2人の血を定期的に吸っているが、どちらも味が大変素晴らしいことに驚いた。

なお、約束のルナの肉に関して、彼女自身に持ってきていたナイフを渡して提供してもらい、それを律歌と恵里は食べている。

これによって2人の技能欄には自動再生なるものが新たに現れており、試してみた結果からルナの再生能力だと予想され、律歌が狂喜乱舞したのは言うまでもなかった。

そして、いよいよ3人は迷宮の最深部に到達する。

明らかにこれまでとは異なる雰囲気になり3人の緊張も高まる中、巨大な召喚魔法陣が床一面に浮かび上がった。

魔法陣より現れたのは——六つの首を持つ、ヒュドラであった。

「これってヒュドラよね!? カッコいい! ペットにしたい!」

本物のドラゴンにテンションが上がる律歌に、ルナは脱力し、恵里はほっこりとしてしまう。

「律歌、そんなことより戦う!」

ルナの叱咤する間にも、既に恵里がモンスターの死体達を突撃させていた。

ここに来るまでの間、かなりの数のモンスターを兵隊にしていたが、ヒュドラを相手にするには力不足であることが否めない。

故に恵里はヒュドラの動きを阻害するように死体を動かしながらも、自らも魔法でもって攻撃する。

強化された魔力や身体能力を駆使すれば近接戦闘も問題なくこなせるのだが、さすがに多数の死体を操りながらそれは困難だった。

一方のルナと律歌はそれぞれ魔法でもって攻撃を開始するのだが——ルナは律歌の魔法らしきものに驚いた。

なんだか光の線みたいなのが律歌の10本の指から出ており、ヒュドラの皮膚を焼いている。

「私の両手はレーザーよ！」

「本当に光の速度だったら最強だよねえ」

「だよねえ、私もそう思う」

2人のやり取りに、ルナは何だかよく分からないがとりあえず自らも魔法を使う。

ここに来るまでの間、2人の戦闘力に関しては中々のものであるとルナは知っていたが、レーザーなるものを律歌が使っているのを見たのは始めてだ。

魔力を超圧縮して高速で発射するということは既にやっていたが。「こいつで最後だと思うから一気にいくわよ！ 火力で押しつぶす！」

律歌の宣言にルナと恵里もまた頷くのだった。



## 辿り着いた真実

特に問題もなくヒュドラを倒して美味しく頂いた律歌達。

この際ルナは当初こそ拒否したものの、肉汁が滴るヒュドラの肉を美味しそうに頬張る2人を見て、どうしても我慢できずに食べてしまい、全身を痛みが襲って悶絶してしまう。

予期した事態であった為、すぐさまエリクサーをルナに飲ませて——口移しではない——更に律歌が治癒魔法を掛けた。

律歌は天職：魔導師ということもあって、全属性に対する適性や耐性があるだけでなく、様々な種類の魔法——治癒や補助、結界など——についても適性や効果を上昇させる技能があり、攻撃以外の様々な魔法についても習得している。

だが迷宮探索時、敵は律歌の一撃で倒してしまうか、恵里のアンデッド軍団に押し潰されるのどちらかであり、比較的強い敵であったヒュドラも3人の大火力で押し切ってしまったている。

実戦での治癒魔法の初お披露目であったが、これにはエリクサーの残量も少ない為、これまでのように景気良くドバドバ使うわけにもいかないという懐事情があった。

幸いにもルナ自身の再生力もあってか、その見た目が変化することはなく、一方で彼女自身にもハッキリと違いが分かるくらいには力が漲っていた。

そのような顛末があったものの、ヒュドラを倒したことで開いた扉の中へ彼女達は進んだ。

そして、彼女達はオスカー・オルクスが遺した記録映像により世界の真実について明かされたのだが——

「神々のやることにしては随分と大人しいわね」

「うん、僕もそう思う」

2人の言葉にルナは尋ねる。

「地球の神々ってそんなに酷いの？」

「実在するかどうかは別として神話とかだと大抵の場合、とんでもな

いのぼっかりね。人間から見ても善いのもいるんだけど、悪いのが際立っている」

「特にギリシャ神話のゼウスだね」

なるほど、と頷きつつもルナは地球って本当に摩訶不思議だと思う。

彼女がそんなことを思っていると恵里は律歌へ尋ねる。

「で、律歌はどうする？ 彼らの思いを継ぐの？」

「うーん……私って正義の味方みたいなタイプじゃないのよね。むしろ、邪神みたいなタイプ」

「だよねえ。君って世間一般からすると非常識な性格だもん。だから僕以外には好かれないよ」

「さりとて思考誘導をしようとする恵里ってば可愛い」

律歌は恵里の頭を撫でる。

それを見て呆れながらもルナが問いかける。

「律歌、質問に答えてない。どうする？」

「現状維持かな。もしも彼らを排除してしまった時、世界そのものに対して悪影響が出たらマズイと思う」

「戦うことになった場合、連中を倒せると思う？」

「私と恵里、そしてあなた。問題ないわね」

そう言われるとルナとしても悪い気はしない。

律歌は更に言葉を続ける。

「けれど、いざ戦争をするってなったら戦力は多いほうがいいのかよ。神々がどこまでできるか知らないけど、人智を超越した力は持っているって考えた方がいい。何なら概念レベルで事象を書き換えてくるかもしれない」

「……それ、勝てるの？」

ルナの問いに律歌は腕を組んで難しい顔となる。

「分かんない。反逆者とやらの魔法次第かも……場合によっては、古巣の協力を得ないといけない」

古巣という単語にルナは首を傾げ、意味が分かった恵里は問いかける。

「いいの？」

「勝利の為には形振り構わつてられないわ。特に何でもしてくるような奴が相手ならね。ハーグ陸戦条約を神が律儀に守ってくれるならいいけど、そんなことはないだろうし……わざわざ人々を煽動してまでオスカー達を反逆者に仕立て上げるくらいなんだから、単なる脳筋じゃない。絶対にえげつないことをやってくるわよ」

そう言いながら、律歌は予想する。

それこそ彼女がやりたかったことを相手はできる可能性を。

負けるよりは良いとしてそれこそ全世界に核攻撃か、それに類する攻撃を加えてくるかもしれない。

エヒトなら惑星一つを滅ぼす攻撃なんぞ軽くできるだろう。

「先生にこの件について手紙でも書いてみましょうか。良くも悪くも風向きが変わったのは間違いない……もしかしたら、オスカー達以外にも過去に神の敵とされた連中がいるかもしれないわね」

その律歌の言葉にルナはある種族を思い出す。

「竜人族がそうかもしれない。500年くらい前に滅んだとされる一族……伝承では神の敵となつたらしい」

「オスカー達のことといい、やるのがワンパターンね。まあ、それが一番手っ取り早くて手堅い方法なんでしょうけども。生き残りはいると思う？」

律歌の問いにルナは首を左右に振り、分からないと答えた。

その答えを聞いて恵里が口を開いた。

「現状維持って方針のわりには、やる事が多くない？ 僕、すごく嫌なんだけど。律歌と一緒にまったり過ごす時間が無くなりそうで……」

「こつちが仕掛けなくても、向こうが仕掛けてこないという保障はどこにもないから、戦いがあるという前提で備えておくことは必要よ。まあ、こつちの動きを神が警戒した結果、攻撃を招くつていう可能性もあるけど、何の備えもないままやられるよりはよっぽどいい」

律歌の言葉に恵里は渋々といった感じで頷いた。

そんな彼女を律歌は抱きしめ、自らの豊満な胸に彼女の顔を埋めさ

せて頭を撫でる。

やがて、撫でられていた恵里がゆっくりと言葉を紡ぐ。

「仕方がないなあ……律歌がやる気になっているのを止めるのも嫌だし、僕も頑張るよ」

そんな2人を見ながら、ルナは肩を竦める。

定期的に2人の世界に入ってしまうので、微妙に彼女は肩身が狭い。

とはいえ魔法の師匠的ポジションを確立しつつあるので、その権威を行使する。

「2人共、修行する。何をするにも強さは必要」

「分かった。恵里、やるよ」

「うん、頑張る」

そして、3人はオスカーが終の棲家としたこの場所を拠点として、更に拠点内の探索にて発見した様々な資料を読み漁り、遺されたアーティファクトを試したりしながら、魔法の修行を開始する。

基本的にはルナが師匠役で、2人に対してあれこれ教えるのだが、その一方で2人からルナは地球のことを学ぶ。

単純にルナが異世界である地球について興味があった為だ。

そのような具合で修行を進めていくのだが、律歌は手に入れた生成魔法について物凄い悪さができるのではないかと考えていた。

また自分だけではなく、クラスメイトの錬成師・南雲ハジメをここに連れてくればもつと悪さができそうだ。

さて、律歌が考える物凄い悪さとは鉱物に魔法やスキルを付与できるのならば、もしかしたら他の無機物にも付与できるんじゃないかというものだ。

もしもできれば、あんなことやこんなことができるとワクワク気分で律歌は水や食塩、瓶や椅子、その他色んな無機物に試してみたところ——問題なく魔法やスキルを付与できてしまった。

爆発する水とかいう暗殺やテロに最適なものから、座ったら回復す

る椅子なんてものまで作成できてしまう。

この結果から律歌は予想する。

生成魔法は無機物に魔法やスキルを付与できる——干渉するものであるならば、有機物に干渉する魔法も存在する可能性が高いのではないかと。

有機物という大きな括りが対象であるならば、そこには人体も含まれる。

人体への干渉——どのようなことができるかは不明であるが、もしかしたら念願のふたなりになれる可能性もあるし、何なら不老不死にだってなれるかもしれない。

もつともルナから得た再生力で既に不老にはなっているかもしれないが、本当にそうであるかはこれから長い年月を掛けて観察する必要があるだろう。

何よりも万が一に備えて、手段は多いほうが良い。

ともあれ、夢が広がりまくった律歌はルナと恵里に対して、自身の予想と夢を語った。

ルナは呆れて、恵里は目を輝かせるという正反対の反応だ。

「律歌が何を考えているか分からないけど、碌でもないことを考えていることだけは分かる」

「そうかなあ。僕は律歌の夢が叶うなら、こんなに素晴らしいことはないと思うけど……」

「あなた達が両性具有になることは良いとしても、不老不死とかそういう類は絶対に火種になる」

律歌はルナの言葉を真摯に受け止めつつ、ルナに尋ねる。

「たぶんだけど、若返りとかもできる。どうするのが良いと思う？」

「幸いにも私と恵里とあなたしかその可能性については知らない筈……私達以外の誰かがここにやってきた形跡はなく、生成魔法を知らなければ辿り着けない予想だと思う」

なるほど、と律歌は頷きながら、恵里を真っ直ぐに見つめて彼女の両肩に両手を置いた。

「恵里、誰にも言わないで。約束できる？」

「うん、いいよ。約束する」

「……大丈夫なの？」

ルナの問いに恵里は大きく頷く。

「当然だよ。律歌との約束は僕にとっては何よりも重いからね……そう  
いうルナさんはどうなの？」

「私の誇りにかけて、誰にも言わないことを約束する」

胸を張ってそう告げるルナであった。

ハウリア族への人道的介入　なお、下心がある模様

律歌達はオルクス大迷宮の拠点から直通の通路にて地上へ戻った。この数カ月間で魔法の修行及び生成魔法の習熟が一段落した為だが、手ぶらで戻ったというわけではない。

持っていけるものは全部持っていってしまえと言わんばかりに、資料からアーティファクトその他色んなものを彼女達は持ち出している。

幸いにもオスカーが遺した指輪型アーティファクト——宝物庫という便利な収納庫が存在していた。

なお、オルクス大迷宮の最深部へ至るには困難になっている。

ヒュドラが召喚される部屋に通じる道を岩などで物理的に封鎖してしまった為だ。

これまでオルクス大迷宮を踏破した者はいなかったが、これから先もそうだとは限らない。

もしも魔人族やら教会やらが本腰を入れてきたら辿り着いてしまう可能性がある。

彼らがオルクス大迷宮に神代の魔法である生成魔法があることを知っているかは不明だが、辿り着いてさえしまえば、自ずと知ることになる。

特に教会は神と戦うならば敵に回る可能性が非常に高く、彼らが生成魔法を手にしてしまえば、非常に面倒くさいことになるのは想像に難くない。

勿論、これには生成魔法を独占したいという律歌の思惑もあった。誰でも使える魔法とは思えないが、こういう貴重なものは仲間内で独占してこそ価値が生まれ、第三者に対しては大きなアドバンテージとなる。

恵里は勿論のこと、ルナもこれには賛同した。

その理由は利益の独占というよりも、神代魔法を世間に広めるのは危険過ぎる為だ。

ともあれ、そんなこんなで地上へ戻った3人だったのだが——モンスターに追いかけられている兎人族の少女に遭遇した。

だが、ここはライセン大峡谷。

発動した魔法に込められた魔力が分解され、散らされてしまう。

それは誰であつても例外ではない。

そして、オルクス大迷宮で作成したアンデッド軍団も、さすがに地上では目立ち過ぎる為、連れてきてはいない。

しかし、この程度でへこたれるような3人ではない。

魔法一辺倒では、魔法を封じられては手も足も出なくなるということは想定された事態だ。

また拠点にあつた資料から、直通の出入り口がライセン大峡谷に通じていることも判明していたことから対策は急務であつた。

そんな彼女達が出した結論は実にシンプルである。

体外には出さず、体内で魔力を巡らせる分には阻害されない。

それならば、魔力で身体能力を飛躍的に強化して殴れば良い——

生成魔法で作ったアーティファクト——爆発する水などの危険物——を使うのではなく、そうなつてしまつたのは律歌が原因だ。

余の手刀こそ世界最強の剣だ——！

彼女はそれをどうしてもやりたかつたのである。

兎人族の少女は目を丸くしていた。

彼女を追いかけていたモンスターだけでなく、他にもやってきたモンスター達に対して殴る蹴るなどの暴行や投石が行われ、あつという間に処理されてしまった。

彼女の未来視では助けてもらえるという場面は視えたのだが、具体



的にどうやって助けられるかは分からなかったが、これは酷い。

そして、シアへ3人の視線が向けられる。

すると、その中の1人——律歌は少女のウサ耳に視線が完全に固定された。

「ウサ耳、触っていい?」

「え、は、はい……」

ずいっと迫られ、少女は思わずそう答えてしまう。

すると律歌は満面の笑みで、そのウサ耳を両手で触る。

「今、私は猛烈に感動している……! そうそうこれこれ、こういうのよ。ありふれた人間よりもありふれていない種族との交流! これこそ醍醐味!」

ここまで感動されるのも何だか気恥ずかしいと少女は思っていると、金髪の少女——ルナが口を開く。

「話が進まないから、律歌は気にしないで話を進めていい」

見た目は幼いが、この子が保護者的な存在なのだろうかと考えながら兎人族の少女——シア・ハウリアは自らの家族の窮状を訴えることにした。

「許せねえ……やっぱり帝国主義者はクソって、ハッキリ分かるわ」

「あの一、何か違う方向へ行ってませんか?」

「大丈夫、シア。私に任せて。革命を起こして皇族貴族全員皆殺しにしてくるから。そいつらの首は木に吊るされるのがお似合いよ」

「はいはい、律歌はちよつとこっちで頭を冷やそうね」

恵里に引つ張られて、律歌は横へ移動させられる。

シアとルナはどうなるのかと見ていると、いきり立っている律歌の頭や背中を恵里が撫で、何事かを呟きながら落ち着かせている。

「……猛獣ですか?」

「思考が斜め上で、なおかつ性格が残念なだけ。それで、さっきの話だけど……帝国に拐われた人達を取り戻すのは、私達だけじゃ不可能。

国に喧嘩を売るっていうのは自殺行為に等しい」

「そうですねか……で、ですが、残った家族達をどうにか安全なところへ……」

ルナはシアの言葉に返事をせず、視線を律歌へ向けた。

彼女が良くも悪くもリーダー的な立ち位置である為だ。

その視線に気がついて、律歌は答える。

「そのくらいは別に構わないけど、何かしらの報酬が欲しいわね」

律歌の問いに考え込むシア。

「まずは彼女の家族を避難させてから色々決めればいいと思う。たぶん性格的に、受けた恩を仇で返すことはできないだろうから」

「そうしましょうか。ところでシア、この辺にライセン大迷宮の入口って、あつたりしない？」

「ちよつと分からないですね……あの、探すのをお手伝いしましょうか？ 家族達が心配なので道中は無理かもしれませんが、その後なら……」

「あ、じゃあお願いするわ」

そして、一行は峡谷をハルツィナ樹海方面へ向かうのだが、その移動速度はとても速かった。

シアを律歌が、ルナを恵里が背負って魔力で身体能力を強化した上で、全速力で駆け抜けた為。

これによってシアがあまりの速度に目を回したものの、それ以外に被害はない。

辿り着いた時、彼女の家族達がハイベリアなるワイバーンみたいなモンスターに襲われていたものの、小腹が空いた律歌達に食糧として冷凍保存されることとなった。

峡谷内である為、魔力効率が非常に悪く、消費される魔力量は多くなってしまうが、そこに目を瞑れば多少の魔法は行使できる。

解体した肉を凍らせるくらいなら問題はない。

さて、ハウリア族と合流した一行は彼らと共に峡谷からの脱出を目指す。

襲いかかってくるモンスターを律歌達は歯牙にもかけずに蹴散らしていく。

モンスターの襲撃以外は道中何事もなく、彼らは峡谷から脱出するのだが——待ち構えていたのは情報にあった帝国兵達であった。

「そこらの悪役みたいなことを言っているわね……」

「何だど!？」

律歌はポロツと本音が口から出てしまい、それを聞いて激昂する帝国側の指揮官。

「いやだって……男は奴隷、女は犯せみたいなのを言っていたし」  
うんうんと頷いて同意する恵里とルナ。

なお、ハウリア族は不安そうな顔をしていたが、その中でシアだけは平然としていた。

未来視でこの場面を視ていたというのものもあるが、帝国に対して妙な敵対心を律歌が抱いていることをこれまでの会話で分かったからだ。過去に何かされたのだろうかとシアは思い、詳しいことは聞いていない。

壮絶な過去があつたりしたら、心を傷つけてしまう可能性が高いと考えていたのだが——それは律歌本人から否定された。

「別に帝国に恨みとかそういうのは無いわ」

「え、無いんですか!？」

思わず問いかけたシアに律歌達3人は答える。

「欠片も無いわね」

「何も無いねえ」

「全く無い」

シアは自分の勘違いに気がついて、顔が引き攣った。

「も、もしかして人間族と敵対はしないとかそういう……?」

未来視で視た未来とは違ったものになったのか、と不安に思いながらシアは問いかけた。

しかし、その問いは律歌から否定される。

「申し訳ないけど、ルナはともかく私と恵里は遙かな昔から人間族同士で争ってきた世界からやってきたので……むしろ、人道的観点から迫害されている亜人族は助けるべきだと思う」

「何をごちゃごちゃ言っている！ 命が惜しければ大人しくしろ！」

律歌の言葉に、帝国側の指揮官がそう叫んだ。

帝国兵達は既に戦闘態勢を整えているが、彼らは侮っていた。

その理由は2つある。

兎人族は身体能力こそ高いものの、基本的には臆病であること。

また律歌達の見た目が単なる少女であることだ。

律歌は深く、それはもう深く溜息を吐いた。

「じゃ、はじめましょうか」

その言葉と共に律歌は攻撃を開始する。

彼女の片手の人差し指から連続して放たれる魔力の弾丸。

盾も鎧も貫通し、瞬く間に彼らは倒れ伏す。

攻撃を受けたことだけは分かった為、どうにか反撃に出ようと試みるが——それも儂い抵抗であった。

立とうとする兵達の両足を撃ち抜きつつ、律歌は問いかける。

「兎人族の行方や帝国について知っていることを色々教えてくれないかしら？ ちなみに私は治癒魔法も使えるんだけど……？」

にっこりと笑ってみせる律歌に、帝国兵達の答えは決まっていた。

## ミレデイ・ライセンの敗北

「じゃ、お互いに何も見なかったということだ」

「ああ、よろしく頼む」

律歌の言葉に帝国軍部隊の隊長が頷いた。

そして、律歌達はハウリア族を引き連れてその場から離れるが、帝国側は見逃した。

實力差が圧倒的であったとはいえ、小娘1人に負けたという事実が表に出てしまうと彼らは末端とはいえ、軍内での立場がよろしくないことになる。

化け物みたいに強かったといくら口で主張しようが、それを証明できるものがどこにもないのだ。

このことを律歌がさり気なく問いかけて彼らに気づかせた後、彼女はハウリア族の通過を見逃してもらうが、帝国軍部隊と戦って勝利したということに関してはなかったことにする旨を提案した。

これを帝国側が受け入れた形だ。

といってもハウリア族だけを彼らの目的地である北の山脈地帯へ向かわせると、途中でモンスターやらに襲われてあっさり全滅しそうであった為、律歌達はそこまで護衛することになった。

しかし、このままライセン大迷宮を諦めるのは嫌だった律歌はハウリア族の護衛にルナを残して恵里とシアを引き連れてライセン大峽谷へ舞い戻った。

帝国部隊は数時間で戻ってきた3人を目撃したが、見なかったことにしたのは言うまでもない。

「どこかでシア、私の仲間にならない?」

「ふえ?」

襲いかかってくるモンスター達を片手間で蹴散らしながら、律歌が

問いかけた。

見た目が人間にしか見えないルナとは違って、シアは明らかに地球にはいない種族である。

そういう種族と交流したいとかつて畑山に語った律歌だが、それは嘘でも何でもなく本心だ。

恵里にもシアのことに關しては既に話はつけてある為、何も言わない。

といつても、シアの場合はそれだけではない。

彼女の未来視は——制限があるとはいえ——間違いなく色んなところから狙われる能力だ。

よそに取られるよりは自分の手元において、有効活用したいというのが律歌の考えだ。

彼女はシアの言葉を待たず更に言葉を続ける。

「ただし、ハウリア族を山脈地帯へ送り届ける報酬とかそういうのではないから。あくまで、あなた個人への勧誘よ……たぶんこれからもその能力がある限り、面倒事が起こるわよ？」

問いにシアはすぐには答えない。

一族を救ってもらったこと、そして未来視は厄介事を招くのも確かだ。

また何よりも律歌達3人は全員が普通とは到底言い難い能力や技能を保有しており、シアと同じか、もしかしたらそれ以上に異質な存在だ。

未来視が使えれば未来を見てみるのだが、あいにくと律歌達と出会う為に使った以上、今現在は使えない。

もうすぐ使える筈である為、シアは判断を保留にしようと考えた。

「ちよつと考えさせてもらつてもいいですか？」

「構わないわ。断つたとしても、あなたの能力の情報を売つたりとかはしないから。どうせ未来を視て判断するんでしょ？」

「……バレてました？」

「私だったらそう思うので……やっぱり、なるべく良い未来を選びたいのが人情つものよ。ライセン大迷宮の攻略が終わってか

らでいいわよ?」

律歌はそう言いながら、手をひらひらさせた。

「それじゃ、そうさせてもらいます。ちなみに律歌さんは未来視が使えたなら、何に使います?」

「……宝くじの当選番号を視るかな」

律歌の答えにシアは宝くじが何なのか分からず首を傾げるが、恵里はうんうんと頷いたのだった。

そして、探し始めて4日目に律歌達はライセン大迷宮への入口と思われる場所を発見する。

ただこの迷宮、どうにも想像していたのとは毛色が違った。

そう確信した理由は看板である。

律歌は思わず問いかけてしまう。

「……ミレディ・ライセンってギヤルっぽい感じがする」

「ギヤルって何ですか?」

「定義は様々で諸説あるわね。ちなみに私は GANGLO になりたかったけど、恵里に全力で止められた」

「当たり前だよ。律歌が金髪に染めて、肌を焼くなんて……」

「でもちよつと見てみたくない?」

「だーめ」

そう言っつて頬を膨らませる恵里に律歌は思わず彼女を抱きしめてしまう。

基本的に彼女がどんな表情を出そうとも可愛いと思ってしまう律歌である。

彼女は抱きしめながら恵里に問いかける。

「変身魔法とか、そういう系統の魔法を使えるようになって、2人でやるってのは?」

「……それならまだ……でも、僕と2人きりのときだけだよ」

「うん、そうしましょう」

そんな2人の会話を聞いてシアは思ったことをそのまま告げる。

「ギャルって何だか奥深いんですね……よく分からないですけど」

「口で説明するのはとっても難しいので、私が変身魔法を習得したら見せてあげる」

「ちよつと楽しみですね。ところで流れ的に私も迷宮に行く感じですか?」

「流れ的に行く感じね。あなたを1人で待たせたらモンスターに食われそうだし、かといっていちいち戻ったところで、ルナとあなたを入れ替えたらハウリア族の護衛がいなくなるし……攻略後、ルナと私がペアでもう一回攻略するわ。このことはルナにも伝えてあるから」

律歌の言葉にシアは引き攣った笑みを浮かべた。

命の危険を彼女は感じていたが、律歌の言うとおりに1人で残されても危険なのでついていくしかなかった。

そして彼女達は迷宮への入口を探し始め、やがて律歌が窪みの奥の壁が回転扉となっていることを発見する。

律歌は興奮気味に叫ぶ。

「すごいー！ 見てこれ！ 欲しいー！」

行ったり来たりして、回転扉をこれでもかとアピールする律歌。

彼女の手には、入った時には持っていなかった黒い金属製の矢があった。

それは恵里達がいる外へ戻ってくるごとに増えているのは気のせいではない。

回転扉を潜った先にはトラップがあることが一目瞭然だ。

「緊張感が台無しですねえ」

「それが律歌の良いところだよ。僕もすつごく助けてもらった」

シアは恵里の言葉を聞いて、色々と複雑な事情があるらしいと予想しつつ、提案する。

「とりあえず、止めませんか? 扉が壊れちゃいそうです」

「そうだね。律歌、扉を壊したら入れなくなっちゃうよ?」

「じゃあ、やめる。あ、入ったら矢がいっぱい飛んでくるから気をつけ



てね」

戻ってきた律歌はそう言って両手いっぱい持っている矢を掲げてみせる。

「その矢はどうするんですか？」

「持って帰る」

即答した律歌に、シアは彼女が非常に凶太い性格であることを悟った。

ともあれ、彼女達はライセン大迷宮攻略に取り掛かるのだが――

「ああもう何なんですか、この人達！」

頭を抱えてシアが叫ぶのも無理はなかったが、律歌はドヤ顔で告げる。

「我が肉体こそ、世界最強の武器であり、防具である……！」

ちょうどそのタイミングで彼女の頭目掛けて上から降ってきた金ダライが直撃して、シアは思わず笑ってしまう。

魔力による身体強化をよく鍛えてあり、更には再生能力までも持っている律歌と恵里にとっては、トラップがトラップとなっていない。

大岩が転がってくれば仁王立ちしてそれを受け止め、投げ返す。

ギロチンのような刃が降ってくれば、真正面から魔力でもって強化した拳で弾き返すなどなど、全体的に非常識であった。

中には溶解液を撒き散らして転がってくる大玉などの危険なものもあったが、攻略を断念するほどではない。

そんな具合に、愉快的ライセン大迷宮を何だかんだで律歌達は進んでいき、甲冑姿のゴーレム達が待ち構えた大広間らしきところで戦闘とパズルの解読を同時に楽しみつつ、更に奥へ。

そして、到着した奥の部屋では部屋自体が大きく移動し始め、いよいよ最深部かと期待に胸を膨らませた彼女達が辿り着いたのは――スタート地点だった。

さすがの律歌もこれにはキレた為、これまでは敢えてやらなかった手段に出た。

迷宮が変化する云々とミレディによるものと思われる文章には書かれていたが、そんなものを無視できるやり方がある。

それは徹底的な破壊だ。

律歌と恵里は互いに協力して、左右の壁と床を殴りつけて破壊しながら進む。

その後ろをシアがおっかなびつくりついていく。

この破壊活動が功を奏しているのか、トラップの発動数は初回と比べると激減している。

前から転がってくる大玉や岩、あるいは天井から降ってくるタイプのトラップはどうしても防げないが、そこは仕方がない。

とはいえ、さすがのミレディも殴って破壊しながら挑戦者が進むというのは想定外であったのか、あるいは壁や床が破壊されることで構造変化機能に障害でも生じたのか、スタート地点に戻されることなく律歌達は再度、ゴーレムが大量にいた大広間へ到着した。

だが、今度は以前には封印されていた扉が最初から開いており、そこは通路となっていた。

更には不思議とゴーレム達も襲ってこなかったが、律歌は念の為に大広間の壁も恵里と協力して破壊した。

壁際に大人しく並んでいたゴーレム達も壁の崩落によって埋まってしまうが、律歌も恵里も知ったことではない。

そして、3人は通路の先へ進んだのだが——そこは不思議な空間であった。

様々な大きさ・形のブロックが浮遊しており、さらに不規則に移動している。

先程の大広間にいたものと同タイプと思われるゴーレム達もまた浮かび、動いていた。

律歌は呟く。

「ここと似たようなのとある天空の城を見た」

「見たことあるんですか!？」

ツツコミを入れるシアであったが、そのとき3人が乗っているブリックの目の前に、下からせり上がってくるモノがあった。

それは巨大な甲冑姿のゴーレムだ。

いかにも最後の試練といった感じの存在であったが、そのゴーレムは律歌達を見つめて――

「君達！・ 修繕する私の身にもなつてよ！」

泣きそうな声で叫んできたゴーレムに律歌は告げる。

「さてはあなたがミレディ・ライセンね？ スタート地点に戻されたときはめっちゃくちやムカついたけど、迷宮を破壊しているうちにスッキリしたから許してあげる」

「ねえ、君って本当に性格が悪いというか、思考がおかしいというか、そういう子だよな？ 絶対そうだよな？」

「私の性格を論じる前に、まずは自分の性格を見つめ直してはどう？ どんなトラップを仕掛けてもいいけど、スタート地点に戻すのだけはやっちゃいけないと個人的に思う」

「そんなことないし！ 君の性格が悪すぎるのが原因！ 慌てて構造変化とかトラップとか止めたけど……それでも直すのにどれだけ時間が掛かるか……本当に最悪！」

「ところで私には律歌って名前があるから、しっかり覚えてね？」

「律歌ね……絶対に忘れない。私の憂さ晴らしも兼ねて、ここでブチのめしてやるんだから！」

そう告げるミレディに律歌はこれみよがしに溜息を吐いて、やれやれと首を左右に振ってみせる。

「あまり強い言葉を使うな、解放者。弱く見えるぞ？」

「ぶつ殺してやるう！」

怒りに我を忘れたミレディはその巨体を活かして拳でもって殴りつけようとするが、そんな単調な攻撃は律歌にも恵里にも通用しない。

しかし、ここで律歌は恵里に告げる。

「恵里、シアは任せた。こいつは私がしばき倒すから」

「うん、分かったよお。僕の方も殴つといて」

「私の分もお願ひします!」

2人はそう答えつつ、恵里はシアを背負って退避していく。

その最中にもミレディの攻撃は止むことはない。

ブロックからブロックへ、軽業師のように飛び移りながら律歌はゴーレムを観察する。

ゴーレムの弱点は核だが、どこにあるか分からない上、その身に纏う甲冑はただの鉄でできているようには見えない。

ここまで散々人をおちよくつてきたミレディが用意した最後の試練と思われるゴーレム。

それが脆いわけがない。

「あれ? あれれー? もしかしてえ、手も足も出ないのかなあ?」

余裕を取り戻したのか、ミレディは攻撃しつつもそんな言葉を掛けてきた。

しかし、律歌は動じない。

「いえ、すぐに倒しちゃったら情報が得られないかもって思ったのよ」

「情報? 私を倒したら得られるかもねー」

「それじゃ、そうさせてもらおうわ」

ゴーレムの核がどこにあるか分からないが、ミレディの魔力によって動かされているのは間違いない。

要は地球の電化製品と同じで、外部から大電流を流してやれば壊れる筈——

律歌はそのように予想し、行動する。

駆け出した彼女であったが、ミレディは何かをやってききそうな予感がした為、上から大量のブロックを降らせる。

降り注ぐブロックは1つ1つが巨大であり、かつ大重量だ。

当たるところか掠っただけで致命傷になりかねないのだが——ミレディは困惑してしまう。

律歌はミレディへ向けて一直線に駆けてくる——邪魔なブロック

をその拳で粉碎しながら。

巨大なブロックが彼女のパンチ一発で木っ端微塵に砕け散るのは、悪い夢でも見ているかのようだ。

莫大な魔力を身体強化に回せば理論的には可能であるが、あそこまで強化してくる輩は律歌が初めてだ。

どんだけバカ魔力を持っているんだとミレデイは思いつつ、タイミングを見計らって赤熱化した右の拳を律歌目掛けて叩きつける。

だが、当たらない。

ここで重力魔法を使ったり何だりと色々と打つ手はあったが、ミレデイは律歌が何をやってくるか興味があった。

単純に装甲を拳で殴ってきたところで、アザンチウム製は伊達ではない。

何よりも、ぶち抜いてきたとしても時間があれば壊れた箇所は修復できる。

迷宮をぶっ壊されて腹立たしいが、それとこれとは別の話だ。

そして、律歌は赤熱化していない部分に座り込み、装甲に手を触れた。

拳を叩き込んでくると予想していたミレデイからすると拍子抜けしたが、すぐに何をやっているのかが分かった為、彼女は律歌に感心してしまった。

ゴーレムはミレデイの魔力を核から隅々まで行き渡らせることで動いている。

そして、ミレデイがゴーレムの甲冑に使っているアザンチウム鉱石は世界最硬の硬度を誇るが、魔力を弾いたりするような性質はない。

そんなゴーレムに外部から律歌の魔力を極めて短い時間で大量に送り込んだならば——内部の魔力がめっちゃくちゃになってしまい、ゴーレムの制御ができなくなるのも当然であった。

制御不能に陥ったゴーレムはゆっくりと倒れ始めた為、律歌はさすが退避する。

そして、完全に倒れたところでミレデイが溜息混じりに告げた。

「まさかこんな攻略のされ方をするなんてなあ……律歌って本当に色

んな意味で予想外」

「それほどでもない。でも、ぶつちやけまだ動けるんじゃない？ 魔法行使とかもできそう」

「んー、そうだねえ……君の魔力を全部外に放出して、ゴーレムの内部回路を再構成して再起動を掛ければ問題ないんだけど、その前に核を見つけれちゃうかな。魔力をそっちに割かないといけないから、大規模な魔法行使もできないし……だから君の勝ちだよ」

その言葉を聞いて、律歌は鷹揚に頷きつつ、ゴーレムの顔の前までやってきてそこに座った。

「……人の顔の目の前に座るって行儀が悪いよ？」

「ぶつ殺してやるとか言ってきた誰かさんよりは行儀が良いと思うわ」

「だってそれ、律歌がめちやくちやにしたからじゃない。直すの手伝ってよ」

「そういうことを想定していなかった方が悪い。迷宮全部をアザンチウムで作ればよかったのに」

「この甲冑を作るだけで、どれだけお金と時間が掛かったと思う？」

「じゃあ、諦めて」

涼しい顔でそう告げる律歌にミレディは深く、それはもう深く溜息を吐いた。

「君さ、性格悪いって言われない？」

「気のせい。で、ミレディ。ここで得られる魔法って何？ この前、オスカー・オルクスのところで作成魔法を貰ったんだけど」

「え？ オーちゃんのところを攻略したの？ それなら最初に言っただけ欲しかったんだけど……ともかく、ここは重力魔法だよ」

「重力魔法？ 本当？」

「うん。このボディだとちよつとアレだから、別室に案内するよ。他の2人もクリアってことにしてあげる」

「あ、実はこの後、もう1回攻略しに来ようと思っただけ……別の子と私のペアで」

律歌の言葉にミレディは再度、溜息を吐いた。

「……君に暴れさせると私の迷宮がぶっ壊されかねないから……その子が私との面接に合格すればクリアにしてあげる」

「ちなみにその子、300年くらい前に滅んだ吸血鬼一族の元女王でオルクス大迷宮に封印されてた」

「君って本当に色んな意味で変わっているね……じゃ、案内するから……」

そう告げるミレディは精神的に疲れていたものの、同時に確信する。

この子なら、あのクソ野郎を――

その思いを胸に、彼女は奥の部屋へ律歌達を案内するべく、ブロックを1つ動かしてそれに乗るよう指示するのだった。